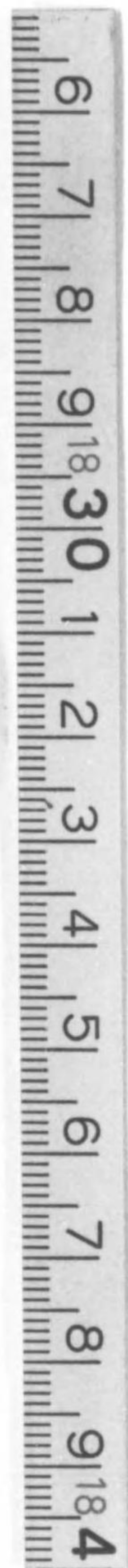
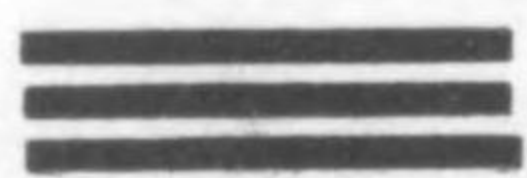


特 222

716



明治文壇逸話



始



特222  
716



水蔭講演全集

第一卷

明治文壇逸話

江  
水  
社  
藏  
版



自序

明治文壇逸話

ラヂオ放送は、一々原稿を作つて、それに數回修正を重ねて、初めて發表。普通の創作以上に推敲を要します。それは耳に訴へる——最も敏感なる耳に、直接語りかけるのですから、勿論發音本位で、用語に人知れぬ苦勞が御座います。

其原稿が澤山溜りました上に、普通の講演を速記者の手で纏められたのも、少しは有ります。そこで、私のラヂオを聴いて下さらなかつた方、或は又あの話を最一度聴きたいとお望みの方にこの講演全集を、見て頂く爲の出版であります。

ラヂオ放送は、新たに生れた講演藝術です。私は然ういふつもりで、主に趣味の題材を選んでゐます。扱て第壹篇の『明治文壇逸話』に、硯友社の事が多いのは、我田引水で、定めしお目觸りで有りませうが、實は一面に於て『硯友社裏面史』完成の計畫を持ちますので、其一部としてどうか御愛讀を願ひます。

硯友社の文士側として唯一人取残された。

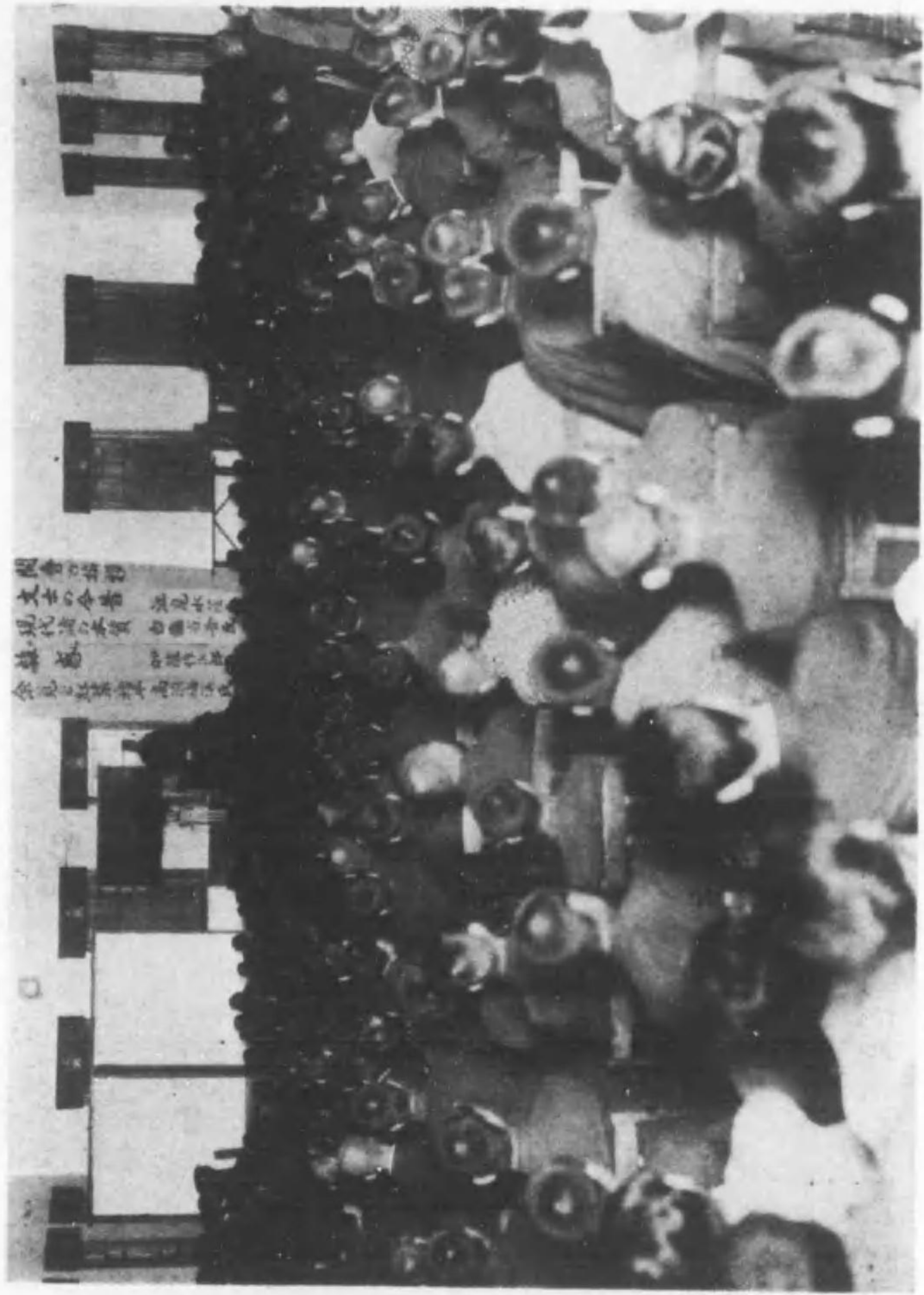
江見水蔭

目次 (明治文壇逸話)

佐渡の紅葉山人	一
最初の文士劇	二七
明治文壇逸話	二九
文士の今昔	三八
明治文壇笑話	四七
越佐と尾崎紅葉	五三
佐渡と明治文豪	五三
紅葉と佐渡	六三
ラヂオ打明けばなし	六四



金澤放送局——放送局——後——昭和三十八年二月三日



# 明治文壇逸話

—水蔭講演全集—(第壹卷)

江見水蔭

## 佐渡の紅葉山人

(大正十四年十月三十日午後七時二十五分より——東京放送局にて)

明治の大文豪尾崎紅葉君は御存じの如く生粹の江戸ツ子であります。其所以か餘りに東京を愛着し過ぎました。爲に、江戸趣味に囚はれ過ぎて居りました。随つて旅行嫌ひで、詰り都會の人情美を愛して、田舎の自然美を好きませんでした。

然るに其紅葉君が、晩年に及んで、佐渡の國へ旅行してから、スツカリあちらが氣に入つて了ひました。曾て石橋思案君に向つて。

『佐渡は本當に好い所だ。僕だから歸つて來たが、君達では、とても歸れないよ』さう言つた事がある位。

それで珍らしく紀行文を書きました。それが有名な『煙霞療養』であります。惜しいかな、此

紀行文は途中で切れて居ります。之を讀んで居りますと、まだ故人が存命中で、眼のあたり面白い土産話を聞かされてゐるやうであります。最後の頁に至ると忽ち十萬億土。幾ら聞きたくても極樂からラヂオは懸つて参りません。如何にも名残惜しい。是は紅葉最負の方は、皆同感でゐられるで有らうと存じます。

處が、私は本年の九月、圖らず佐渡へ旅行致しました。あちらは誠に風景が宜しい。名所古跡にも富んで居りますが、先づ第一は順徳院の御遺跡、是は申すも恐れ多い。次いで日蓮上人、それに續いての人氣者は、確かに吾が紅葉君であります。土地の人から色々逸話を聞きました。又遺墨を見せて貰ひ、其遺蹟をも探つて見ますと、中絶してゐる『煙霞療養』の後篇が、巧く出来上る次第で御座います。それを今夕お話し致す次第で御座います。

故人の佐渡行きは明治三十二年の夏で、義理の叔父に當る横尾と云ふ人が、新潟で役人をして居りまして、それを尋ねて行つたのでありますが、此横尾さんの謡曲の友達に羽田櫻村と云ふ人がありまして、今も此人は健在で、郷土紹介の篤志家ですが、此人が佐渡へ歸ると云ふので、それでは一緒に行かうと成つたのでした。此羽田氏を横尾の叔父さんが、謡曲の相手に呼ぶ時に、紅葉君に代筆をさせて居ります。明治の大文豪が代筆は甚だ面白い、之は今も、羽田氏が珍藏して居ります。

扱て七月八日の朝、僅か五十噸の度津丸と云ふ小汽船で出帆して、シケを喰つて、大分先生弱つたのであります。九日は夷町で暮らし、十日に其處を出立、俣で相川街道を取り、道途をそれ、遺蹟を巡見して、河原田に一泊。十一日には河原田から澤根町、中山峠を越して相川の町に入つて居

ります。十二日には佐渡の金山、相川鑛山見物。是で筆が切れて居ります。『煙霞療養』は此處までしか書いて有りません。誠に名残り惜しい。是から先が私の調べました故人の旅行記に成るので御座います。

紅葉君の泊つた宿は高田屋と云ひます。主人まだ健在です。其人から色々聞きました。十二日の夜は歓迎會が、壽司嘉と云ふ料理屋で有りました。然るに十三日から相川名物の鑛山祭。金山のお祭です。町中の人々が三日三晩踊つて、踊り抜くと云ふので、故人も大喜び、初めは唯見物して居りましたが、群衆心理に捲き込まれて、後には一緒になつて踊つたと云ふ。紅葉君は厳格な人でありましたが、興に乗じると、時々脱線します。矢張り詩人肌の人なんです。

御代なれや踊らぬものは浪ばかり

其時吟じた故人の句が、何よりの證據です。尤も此時ネプトが出来て居りました。紀行にも書いてありますが、故人の旅には、雨とネプトは附物で、曾て私達と吉野へ旅行しました時も、矢張これに悩みました。それでも奈良の料理屋で、私達と一緒に踊つた事がありました。相川の町でもネプトで跛足を引きながら、定めし踊つた事であらうと思はれます。或は其爲にネプトが吹切つたかも知れません。踊の句はまだあります。

手を打つよ踊團扇のへし折れて

暗闇の紐な絶たれそ踊笠

面白の旅の衣や踊り肉胼

タコの出来るまで踊つたか、どうか、それは疑問です。併し餘程踊は氣に入つたと見えまして、

歸郷してから某氏に寄せた句に。

盆の月踊らぬ都うかりけり

江戸つ子が盆踊のないと云ふので、都を憂かりけりと言つてゐるのが面白い。

扱て相川から引返して、再び河原田の町に入り、此處から、越の松原とか、雪の高濱とか、新町に出て居ります。彼の順徳院の眞野の御陵。國分寺、阿佛坊、或は檀風城に資朝卿及び阿新丸の昔を偲んだ事でありませう。が、惜しい哉、眞野の御陵の句はありますが、其他での吟詠は見付かりません。何でも其邊に五六日滞在してゐたらしい。餘程眞野の入江が氣に入つたと見えます。其處で御陵を吟じた句は佐渡に於ける紅葉の代表作のやうに恰く知られて居りますが、それは、

松風を頂く汗の額かな

是は其御陵で直ぐ詠んだのではなく、山本清右衛門と云ふ宿屋に歸つてから、一旦寢床に這入つたものが、夜半に、「出来た〜」と叫びながら、飛び起きて書いたと云ふ事で、以て故人が、如何に俳句に苦心したかと云ふことが分ります。

さうかと思ふと即興的口吟もありまして、新町の十王堂と云ふ古寺に、人形芝居があるのを、山本半藏と云ふ土地の考古家と一緒に見物に行きました。是は野呂間人形と云つて、甚だ古風なもので御座いますが、それを見て、直ちに。

野呂松がのろりと出たり夏の月

と口吟んだと聞きました。

扱て之からが小木のお話——元來小木の港は舊幕時代には佐渡の表玄関。出船入船が非常に多か

つた。それで自然に旅客の優待法が發達して居ります。此處に斯う云ふエピソードが有ります。昔或る大船頭が馴染の女に別れる時に、餘分の金を與へました。すると女は忽ち柳眉を逆立て、わたしは金の爲にあなたの世話をしたのではない、見るも汚らはしい、と云つて其金を海に投げ捨てた。船頭は感激して。

「成程、小木の女は本當に親切だ。又來るぞ。」と言つて歸つたといふ事です。是は併し小木のトリツクで、海へ投げたのは石ころ、本當の金は何時の間にやら、抜き取つてゐたといふ、まアそんな噂のある所です。景色は非常に宜しい。

此小木に紅葉君は、ぶら〜と滞在二週間に及びました。檀座屋といふのに宿を定めました。『佐渡讀史評論』と云ふ本の中に、斯んな事が書いてあります。『紅葉は小木に入つて木伊乃探が木伊乃になつた。小説の材料を採りに來て、却つて材料になつた。』と云ふ意味で、書いてあります。

そこで佐渡の紅葉を語る以上は、小木に於ける紅葉が一番趣味が深い。それを詳しく説く事になると、勢ひ紅葉のロマンスを言はなければなりません。是は甚だ複雑で御座いますので、後廻しに致します。どうか最後までお待ちを願ひます。

扱て紅葉の泊つた小木の宿の檀座屋と云ふのに、私も泊つて見ました。惜しい哉、當時の家は明治三十七年に焼けました。けれども、ほゞ原形の家が建てられました。故人の寢起したと云ふ部屋に當る處で私も一夜を明かしました。主人夫婦は今も達者です。主人は本年七十五歳、赤ら顔の、でツぶり太つた、鼻の低い、面白い爺さんです。紅葉君は此檀座爺さんが大層氣に入りました、よく供に連れては、羽茂と云ふ所へ遊びに行つたそうです。小木から一里許りで、落着いた、誠に感



じの好い所です。此羽茂で日蓮の龍の口の御難、と迄は行きませんが、紅葉羽茂の御難と云ふ逸話が遺つて居ります。

羽茂の有志が數名で、紅葉君を羽茂川の鮎漁に誘ひました。此處の鮎の漁法はヤスと云ふ竹竿の先に金具の附いた漁具で、それで鮎を突くのです。それから網でも打ちますが、紅葉君は大ハシヤギで、いきなりヤスを持つて川の中に飛び込んだ。しかし馴れないから、鮎を突かず、石許り突いてゐたさうです。それで後には、人に網を打たせて置いて、其網の中にある鮎を突いた。是なら大丈夫。この時の句が。

鮎突くや矢を射る水のすき間より

と、いふのですが、水のすき間でなく、網のすき間、と有るべき筈。

扱て其歸り掛けの事です。紅葉君はヤスの先に鮎籠をぶらさげて、ぶら／＼やつて来ると、忽ち往來の眞ん中に、六尺豊かな大男が立塞がつて、「コリヤ待て！」と來た。此時既に土地の有志は、蜘蛛の子を散らすやうに、ばらばらと逃げ散つた。故人一人が捕まつたわけです。

是は羽茂川の鮎漁に付いて漁業組合があつて、當分禁漁の申し合せがしてある。けれども、東京の文豪を歓迎するのだから、なに構はないといふので、有志が無断でやつた仕事なので、それを組合頭の葛西傳右衛門といふ頑固老人に見えられたわけで、傳ネム老人は又、文豪とは何んだか、紅葉がどんな人間だか、そんな事は知らない、兎に角禁漁を、つひぞ見も知らない顔の人間が破つたから大立腹、拳骨を振上げて、いまにも殴り付けさうに成りましたが、紅葉君の方では笑つて相手にしませんでした。まア其處へ人もやつて來て、結局、折角漁つた鮎とヤス竿とを取上げられて了

つて、一段落着いたと云ふ。土地の人は今でも傳ネム老人の事を言つて、山人には氣の毒だと言つて居ります。是が紅葉山人羽茂の御難の一節。

しかし其後も、羽茂へは度々鮎漁に出掛けました。傳右衛門老人とも妥協がつかましたから、名物の鮎の石焼き、或は地獄落しと云ふ奇抜な料理法で、羽茂川の鮎を味はつたと云ふ。食道樂の人でしたから、是はたしかに喜んだと思はれます。

それから羽茂には未だ斯う云ふ逸話が遺つて居ります。其頃縣會議員をしてゐた海老名武十郎と云ふ紺屋さんの家へ、ぶらりと遊びに出掛けた。其處のお婆アさんが九十の賀だといふので、祝ひの俳句をどうか先生願ひますと頼まれた。宜しいと言つて、引受けたのはいいが、なか／＼出來ない。紺屋筆のチビたので、鼠半切を草稿にして、書いては直し／＼、其長さ約一間。で、漸く出來た俳句は。

山陰や甘草の畑作る如

句は唯是だけではありませんが、以て故人の創作に苦心の程度も分ります。と同時に、神經衰弱の程度も實に分るのであります。併し此出來上つた半折よりも、今日では其草稿の方が珍品で、是は今風間昂三郎氏が所有して居ります。

斯うして小木から羽茂へ始終往來をして居りました。土地にも非常に馴染んだので、土地でも亦尾崎に對する印象が非常に深い。紅葉君の髪の刈り方を眞似て、前の方を長くしてゐた。之を尾崎風だと云つて喜んださうです。又ケンチウの絞りの兵子帯を眞似して、呉服屋へ注文して、尾崎風の兵子帯と云つて、一時流行つたと云ふ事です。それ程親しみを残しましたただ滞在も長かつた。

自分でも吃驚したので有りませう。急に歸り支度をして、俾で山越し六里の道を新町に戻り、今度は國中街道と云ふのを取つて、元の振出しの夷町に戻つたのが、八月三日頃でありました。すると素通りにされた新穂と云ふ町の有志が承知しません。明治の文豪を取逃しては土地の恥辱だと云ふので、中川收之と云ふ老人が主張致しまして、息子の中川治作と云ふ、今は新潟で宿屋をやつて居りますが、此人に名刺を持たして、わざわざ夷町へ迎へに遣りました。處が夷の町でも、五日の日には歓迎會があると云ふので、其僅かな間を都合して、後戻りを致しました。新穂では短い割に逸話も有り、又、東京に歸つてからでも、新穂の人達とは別して親しく文通などしてゐた様ですが。此處で珍らしく紅葉君が、講演を試みてゐる。それも教育會に臨んでの講演であるから、講演嫌ひの故人としては、之も御難の一つであつたかと存じます。

其筆記を羽田君が持つてゐるので、私も一讀致しましたが、それには斯う書いてある。

『自分は小説に必ずしも地方の材料を採らない。山水よりも社會の現象を主として居る。と言つて社會小説ではない。主に戀愛小説である。それも都會を主たる舞臺として居る。だから旅は餘りしなかつた。處が今度こちらへ渡海して來て、實に驚天動地の感がある云々。』

これからまだ言ふて居りますが、先づ初めに斯う云ふ講演をして居ります。是で見ても紅葉山人が、人事から自然へ、都會美より自然美に興味を感じて來たと云ふ事が分る。將に一轉化を見るべき時期が來たものと思はれます。

それから逸話の中で、是は高野柳翠君が、特に私に話して呉れたのでありますが、佐渡の名物にサツコリと云ふ一種の織物があります。厚司とも違ひますが、まアそれに近い變擬子なものであり

ますが、其織物を見て、此サツコリを是非持ち歸つて、江見に着せて見たい、さう云つて笑つたさうです。其頃私が兎角變な風をして居りましたので、サツコリの袖無し羽織の似合ふのは、社中でも江見許りだと思つたのでせう。

着せられたら私も困りましたらうが、併し、旅に出てゐて、私と云ふものを念頭に置いてゐて呉れた故人の好意を考へまして、私は其時知らず識らず泣いて了ひました。

此好意に對しても、二十三回忌の今日に於て、故人のローマンスを此ラヂオで大勢の皆様に通葉抜くと云ふ事は、甚だ友達甲斐のない、聊か忘恩的であります。實は小木の話は當時の新聞にも亦雑誌にも出ましたし、一度佐渡の地を踏めば、必ず小木の話が出るのですから、私が隠しまして何にもなりません。

けれどもそれには誤聞がある、誤解がある。私の正確なる調査を以て、事實を事實として正しい小木の情話を發表すると云ふ事は、聊か故人に對する報恩の一つではあるまいかと存じまして、愈々是から紅葉小木のローマンスを申し上げます。

私は昨日青山へ墓参りを致しまして、石橋、丸岡、澤田の硯友社諸先輩立會ひの上で、今日の講演に就いて、豫告もすれば詫びもして参りました。故人も定めし、地下に苦笑して居る事と存じます。

扱て、佐渡で紅葉の話が出ると、直ぐ小木の事に及びます。其處で土地の人は、『何も佐渡に美人が無いでは無し、同じ御最下さるなら、もう少し美しいのを撰んで頂きたかつた。』と斯う云ふのが印刷で廻したやうな到る處での不平談であります。

それに就いて斯う云ふ話があります。紅葉君が行つて後間も無く遅塚麗水君も同じく佐渡巡りを致しました。さうして小木の女の寫眞を手に入れました。それを石橋思案君の手に渡して、一つ紅葉君を驚かしたらよからうと云ふ事でしたが、石橋君がそれを見て、餘りに美人でなさ過ぎたので、何だか故人のブライドを傷付けるやうな氣がして、到頭見せずにとつたと云ふ、先づそれで其婦人の御想像を願ひます。

然るに其婦人は、まだ健在でありますから、敬意を表して、其名前を申し上げませぬが、其婦人の持つてゐる三味線の裏に、故人が何か書いた。それが現在でも遺つてゐる。曾て吉原の名妓お夏さん——此人はお定さんと共に、紅葉物の愛讀者として、當時の新聞にも色々美しい噂が載つて居りますが、紅葉を追慕の餘り、どうかして、其三味線を手に入れやうとしましたが、小木の婦人は、是ばかりは、いけないと言つて、手放しませんでした。其談判の衝に當つた中川老人から此事を私は聞きました。

それから坪谷水哉君の語られた所に依ると、小木の裏山では、紅葉と某妓との別れの遺蹟と云ふのがある。そこを伸で通ると、車夫が得意になつて説明するさうで。

汗などと拭いて貰うて別れけり

さう云ふ句を紅葉山人が遺したと云ふ事であります。「金色夜叉」のお宮と貫一との別れの記念碑が熱海に建つてゐる位なら、此處にも是非、——汗などと拭いて貰うて別れけり——の句碑があつても好い。まアさう云ふ話でした。全く其通りで、私も佐渡の人から、盛に之を聞かされまして、實に私も汗を掻きました。

それから是は殆ど全国的に廣まつて居る事で御座いますが、別れに臨んで故人は一冊の原稿を婦人に渡しました。

「僕が死んだ後、もしお前が困るやうな事があつたら、之を世の中に出せ。さうすれば一生樂に暮らせるから——」さう言つて別れたと云ふことであります。

惜しい哉其原稿は、小木の大火で焼けて了つた。それにはどんな小説が書いてあつたらうかと、皆それを遺憾に思ひ、どうかして見たかつた。「金色夜叉」以上の傑作であらうと、色々噂が立つたのであります。

まアそれだけの情話が佐渡には御座いますが、三味線はいさ知らず、其原稿と云ふ點は、紅葉を中心としてゐた硯友社の同人は、誰も信じて居りません。何故ならば、神經衰弱で筆が執れず、其療養の爲に旅行した者が、旅先の短時日で、容易に小説を脱稿する譯がありません。前に申した通り、俳句一つ作るにも、約一間からの下書きを、するやうな人なのです。日に三行しか書けなかつたと云ふ事もある紅葉山人。文章報國を以て期してゐる人が、一字一句を忽せにしない、其平生から見て、小木の二週間に小説は愚か、俳文一つ出来やう譯がないと思はれます。

それで私は考へました。どうも人の噂ほどアテに成らぬものはない。他の事も甚だ怪しいと存じまして、随分念入りに調査を致しました。

先づ第一に相手の婦人、それは美人では決してありませんが、小木の女としては珍らしく文字が讀めた。紅葉君の小説も前から愛讀してゐた。それによく理窟も言つたさうです。今日ならば、文學藝妓と云ふのでせうが、其頃あちらでは、民法藝妓と云つて評判して居りました。

それが権座屋の抱へで有りました。まだ其外に三四人、それ等がよく紅葉君の身の廻りの世話をしたと云ふ。是は権座老人の直話で、着物の世話とか、蒲團の上げ下しとか、殊に食べ物に八釜しい紅葉君の、おかず拵へとか、總てよく面倒を見たのでありまして、所謂小木のトリツク、それにヘビーを掛けて世話をした爲に、故人も大層喜んだと云ふ、其程度に過ぎなかつたので。勿論三味線には書きました。

こいちやく／＼に二度だまされた

又もこいちやくでだますのか

此三味線は壊れまして、今では皮だけ剥して遺つて居ります。此俚語は、別に新作したものでなく、土地で唄ふ歌に過ぎないので、こいちやく／＼とは、来いと云へばが詰つたのです。が、藝名がおかん屋の小糸とか云つたので、小糸ちゃん、こいつちゃん、それを来いちやと引掛けたといふ説も有りますが、素より取るに足りません。この他に猪波屋のお竹といふ美人が有りました。それを或人が君に紹介しましたが、故人は美人のお竹よりも、美人ならぬ某女の方を最辰にした。それは前にも申しました通り、固より身の廻りの世話をさせる程度のもので御座いますから、美人とか醜婦とか云ふ事は、チツとも問題ではなかつたのです。

其處で結論は、紅葉が小木の長逗留は、結局某女の爲ではなく、小木及び羽茂の地に親しみを深くしましたので、東京に許り執着してゐた人が、初めて地方味、或は自然美に目覺めて、知らず識らず長逗留になりましたので、それは新穂の講演に、今度こちらに来て驚天動地の事許り云々と云つてゐるのが、何よりの證據であります。それから昔に小木、羽茂の土地のみならず、権座屋の親



紅葉遺墨 (三味線の皮)

権座屋内小糸 (三十歳)



爺を初め土地の有志にも、否、純朴な佐渡の土地の人全體に惚れ込んだので、單に某女のみと限つたのではなかつたのです。

先程つい口を滑らしましたので、藝名だけは發表しても差支へありませんまい。おかん屋の小糸なる婦人は、他の女よりも文字を解したといふので、少しく他よりも餘計に最良をしたと云ふ、それだけの事だつたと云ふ事を斷言致します。

然らば、原稿は如何——となるが、それは、實に、權左老人の紹介で、私が直接當人の口から聞いてよく確める積りでありました。遺憾ながら掛け違ひまして、よう會ひませんでした。此某女は一時有名な阿佛坊。あの妙宣寺の大黒様になつてゐたさうで、その時代には紅葉の最負した女だからと云ふので、阿佛坊へ行くと、わざ／＼臺所の方へ廻つて、其大黒様を覗いたと云ふ。

阿佛坊には有名な大黒柱がありますので、その大黒柱を拜見するやうな顔をして、其實此大黒様を拜みに行つてゐた。處が、或新聞で其大黒の悪口を書いたと云ふので、和尚さん、すツかり怒つて了つて、『もう嬬は見せん。』と成つた。其後巖谷小波君が行つた時には、其見せん中なので、僅に大黒の後姿だけを拜んだと云ふ話。

近年其和尚が死んだので、今は小木の町に歸り、立派な紳士の夫人になつて、幸福に暮してゐる。其紳士も捌けた人で、紅葉さんの友人なら、嬬を見せても宜いと云ふ處まで、話が運んで居りましたが、掛け違つて、残念な事を致しました。

所が羽茂の町で、私は、濱屋南濱と云ふ、元助役をしてゐて、今では繪を畫いて居る人に會ひました。此人から圖らず、謎の鍵を授けられました。

それは大正十三年の頃、南濱子が新潟病院に入院してゐた。すると例の問題の婦人も入院中で、好い機會ですから南濱子は、疑問の原稿の事を問うて見たのでした。と、全くそれは小説ではなく單に手紙に過ぎなかつた。手紙を原稿紙に書いたものであつて、それを人が見せて呉れと云ふのを、きまりが悪いから見せなかつた。見せないから人が、様々に噂を立て出して、原稿紙に書いてあるのだから、小説だらう。其だらうが小説だと確定的になつたので、是はさもあるべき筈。總て噂と云ふものは、擴大もされ、ば、變轉もする。紅葉小木のローマンスなんて、何でもない話。

然らば——汗など拭いて貰うて別れけり——それは如何となりますが、場所は小比叡と云ふ巨利の入口、そこ迄は、某女が唯一人で送つたのではなく、權座屋の老人夫婦、其他の婦人、及び有志の人達が、賑々しく送つて来て、持參の酒肴を開いて、一騒ぎして、それで別れたので、いざとなれば、それは小木のトリツクも出たらう。汗も出ましたらう。——汗など拭いて貰うて別れけり——唯それだけの話だと云ふ事を、生證人の權座屋の主人から聞きました。是で大體故人の爲に雪冤も出來た譯で御座います。

が、茲に面白い手紙が一ツ残つて居ります。それは佐渡を立つて、新潟まで歸つてから、新穂の中川氏に送つたもので、其文言は。

水津の岬を出でし船の揺るゝに目覺むれば、夜色沈々として一時を過ぎたり。乍ち蕉翁が吟を懷ひて、船室の急梯を昇る。

出て見るや百立つ沖の天の川

秋近うして遊士の魂、初めて驚く。明十一日、一番汽車にて歸京、臺侯、茶狂、いかつち、

常山、紫樓、其他諸氏へもよろしく御傳言頼み入り候。

汗虱搔かする人を思ひけり

とあります。秋近うして遊士の魂初めて驚く。此文句が非常に宜しい。夜半小汽船のデッキに駆け上り、佐渡の海に天の川を眺めて、芭蕉翁の。

荒海や佐渡に横たふ天の川

の句を思ひ出したと云ふ、山人の風貌見る如しで、此手紙を読むと、故人のイキの掛つた者は、何とも言はれぬ感慨に打たれます。が、此處に疑問は。

汗虱搔かする人を思ひけり

とは、誰の事を言つたのでありませうか。安政の俳人、曉臺が、矢張り佐渡で。

蚤に蚊に狂ひて夜の衣裂く

と吟じ、又芭蕉翁が『奥の細道』に。

蚤虱馬の尿する枕元

と吟じてありますが、それに縁を引いた句意でありませうか。

汗虱搔かする人を思ひけり——此句意こそは、永久の謎として遺されたものと存じます。まだ他に逸話もありますが、大分長くなりましたので、『煙霞療養』の後篇は是で完結と致します。

これが私のラヂオ初放送でした。局で紅葉の記念放送をするに就て、當時の局長服部慊夫氏が、巖谷小波氏に、其講師の選定を依頼し、小波氏が自分を推薦して、其結果が、道滿謹吾氏の來訪と成り、私も光榮として承諾しました。それは佐渡から歸つて間もなかつた時でし

た。猶小木のロマンスに就ては、再遊で新材料を得て、訂正を要します。(佐渡へ佐渡へ) 参照ありたし)

## 最初の文士劇

(昭和二年二月二十三日午後七時二十五分より——東京放送局にて)

明治の二十三年の頃。演劇改良といふ聲が大分高く成つてまゐりました。それで、我々硯友社と申します文士の團體で、一ツ文士劇をやつて見よう。文士が自から芝居をするといふ、唯それだけでも、演劇向上の一助とも成らうといふ、エライ鼻息。

然るに、文士々と云つた處で、其頃は未だ半分は學生で、全然文士には成切つて居りません。尾崎紅葉、石橋思案、川上眉山の三人、これは帝國大學の文科に通うて居りました。それから岡田三面子が、大學の法科。それに醫科大學の學生で多田漁山、高等商業の卒業生丸岡九華、それにお馴染の巖谷の小父さん、漣山人。私と一緒に杉浦重剛先生の塾に未だ居りました。其所で最初にお詫びして置きます、此講演は、多少自己紹介に陥りませうけれど、何分今から、三十七八年も前の話で、既に私達は過去の人間で御座いますで、それはドウか御寛容を願ひます。

之より先、帝國大學の學生が、英語で芝居を演じました。忠臣藏の勘平腹切。それを本式に、衣裳、髪をつけて、英語で芝居をしたといふので、ケシカランといふ、大變な攻撃。此時の勘平も、

お軽も、今は堂々たる實業家、或はお役人でゐられますが、その當時ではヒドク攻撃されたもので。

その直ぐ後で、硯友社の連中が、英語どころか、日本語で芝居をしたといふので、大變な反對で、何んでも岡田朝太郎君などは、時の學長、穂積陳重先生に、譴責を受けたといふ。

況してや、杉浦先生の塾にゐる巖谷と江見との二人が、それに加はつた、甚だ不都合だ。殊に江見の如きは、平常鯨子張つて居りながら、顔にお白粉を塗るとは何事だといふので、イヤもうさん／＼。早速退塾させろといふ、強硬論者が多かつたのですが、杉浦先生も苦笑ひを成さつて「アノ二人は別だよ」といふお言葉で、どうやら解決が着いた様な次第で。

ですが、我々は決して木戸錢を取つたわけでもなく、又切符を賣りつけたのでも御座いませぬ。文壇の人々、その他の知人を招待して、不行届ではありませんでしたが、お茶にお菓子位は進呈しましたので。この頃の文士劇とは、チツと行き方が違つて居りました。

そこで紅葉が云ひますには、今まで型の有る物を演じたのでは、團十郎菊五郎と比較されて、甚だ不利益だから、總べて新作で行かうといふ。——團菊の二名優に比較されるツモリでゐたんですから、大變なもので。

先づ開幕劇として『八犬傳』の富山の段を出さう。既に芝居にも常磐津にもあるのだが、別に新しく書き卸せといふ事で、それを仰せつかつたのが私で。

そこで、里見の息女伏姫は、巖谷漣。金龜大助が私と極りましたが、どうも犬の八ツ房に成り手が無い。そこで尾崎が石橋思案に向つて、お前八ツ房にお成りと頭から強制的です。

石橋思案、フンガイして。宜しい、やるよ、と引受けました。「その代りおれは飽くまで犬の役を忠實に勤める。八ツ房といふ犬の性格を、細かい寫實で現はすから、覺悟して居れ」といふ宣言で、これには一番に巖谷が驚いた。かんじんの愁嘆場に、犬が寫實で以て、チン／＼をしたり、お預けをされた日には、メチャ。それに第一、石橋の様な大きな頭の犬が、ドコにあるかといふわけで到頭願下げに成りました。

それで次ぎに確定しましたのが『増補太平記』といふので、大塔の宮の十津川落に、片岡八郎の討死といふ、史劇が二場。これは私の新作。二番目は廣津柳浪の材料で、同じく私の新作『積怨恨切子燈籠』といふ仇討物が四幕。大切は『五人男』に三人役者が多いので『花競八才子』といふ。これは銘々に自分のツラネを書いて、當り作の小説を名前につけて、たとへば色懺悔の徳五郎とか妹背貝の末吉とか、然ういふ名前前で、文學上の氣焰を吐くといふ趣向でした。

それで衣裳は成るべく自前。鬘だけは仕方がないが、それも仕出しの冠るのは、大森鬘で間に合せろといふ事で、アノ張りボテに棕櫚の皮を染めて、髪の代りにした奴です。それを尾崎が、ワザワザ大森の山谷まで出かけて、注文して來ましたが、今度は私に、ソレを取りに行けといふ。どうも詰らない役廻りで。唯今ほど行通の便利が能くありません上に、私のふところの都合も好くありませんので、大弱り。イヤ／＼ながら先方へ行つて見ると、製造元の老爺が云ひますには「鬘は出來てゐますが、入物が有りますか」といふので、そんな物は持つて來ないと答へましたので「それは」とポロ／＼の、大きな葛籠を呉れました。それに大森鬘を澤山入れまして、荒縄で胴締めをして、その葛籠と合乗俵です。大森驛から汽車で元の新橋驛へ着くと、又合乗俵で、九段坂下まで

歸りましたが、その頃、石橋の家は、坂上の飯田町ですから、そこまで俵で行くと好いのですが、ズツと俵代が高くなるので、坂の下で降りました。

雨降り揚句ですから、私は高足駄を穿いて居りまして、それで葛籠を肩にかついで、途中まで登りますと、突然胴メの荒縄が切れたので、葛籠が肩から落ちまして、中から、坊主鬘や、嶋田鬘やデコ／＼の福助鬘などが飛出して、風に吹かれてコロ／＼坂をころげ落ちるといふ騒ぎ。往來の人は皆ビツクリして見てゐましたが、それを高足駄で追ッかけ廻はす私の格好なんて、丸で成つてゐませんでした。

稽古はドコでしたかと云ひますと、石橋の阿父さんの別荘が根岸にありましたので、そこへ皆通ひました。それが大晦日までつゞいたのですから、近所では驚いて「如何なる好い月日の下に産れた方達か。年の暮に芝居のお稽古を成さるなんて」大層羨んでゐたさうですが。實は、ソレ程結構でもなかつたので。

そこで、どうも立廻りだけは、タテシの手に掛らないといヶなといふ譯で。坂東甚五郎、後に市川九字藏と成つた人に來て貰ひましたが、此人が急に、團十郎の一座に加はつて、京都へ乗込むといふので、暇乞に諸方を廻つて、その紋附の儘、最後のお稽古にまゐりました。その晩の歸りがけです。誰か見送つて行けば好かつたのですが、稽古に夢中なので、そのまゝにしておきますと、電燈なんか絶體に無い時代ですから、眞暗な中を、先生、庭石を傳つて、少し行つて、ソレから左へ曲つて門へ出るのを、ツヒ眞直ぐに行き過ぎたから溜りません。忽ち池の中へ飛込んで了ひました。「助けて呉れ」と悲鳴を上げたさうですが、此方は稽古で夢中ですから、何んにも知りません。

先生漸く這ひ上つて來ましたので、急に大騒ぎと成りました。

何分大晦日近くの事で、甚五郎先生ブル／＼ふるえてゐる。それでねんねこを貸して着せましたが、先生、京都行の時の紋附、メチャ／＼に濡らしたのを、帯でからけて、悄然として歸つて行きましたのは、氣の毒とも何んとも、云ひ様がありませんでした。

尾崎紅葉も亦麴町富士見町の、武内桂舟畫伯の家で、八人男の衣裳の製作に、夜遅くまで掛つてゐまして、それからテク／＼牛込への歸り路。セリフを暗誦しながら「何が何して何とやら」と、好い心持に成つて歩いてゐると、忽ちドブへおツこちて、向脛をスリむいて了ひました。アノ、唯今、陸軍々醫學校の有りまする、あそこが、以前は折曲つて、鍵の手に成つて居りましたが、そこを眞直ぐに行つたから、ドブへおちたので、モットモ其時分は暗う御座いました。

いよ／＼二十三年一月の五日。小石川の佐藤といふ友人の家で、夕方から開催致しました。舞臺は廣い庭へ新築しましたので。

一番目は、片岡八郎の役を、石橋思案が引受けまして、揉鳥帽子に甲冑姿で、ノツケに花道から出て十津川の關所に掛り、演説口調のセリフで、今此所へ、貴とき御方がお通りになるから、關の戸を開けて御出迎へしろといふ。中から番卒が二人出て來て、それを拒み、大立廻りと成るのであります。此番卒の一人が巖谷漣山人。

然るに、此立廻りが、實に激烈此上なく、眞劍そのまゝで、見物が皆ハラ／＼した。恐らく之が劍劇の元祖かも知れません。依田學海先生などは「讀賣新聞」の紙上で、これでこそ演劇の改良だと、大眞面目で譽められました。



ソレは其譯で、石橋は近眼だから、何處から斬つて掛るか分らない。あらかじめ此方も其覺悟を要するといふので、巖谷他一人は、命がけて掛つたのですから、之は眞に迫つた譯。

それから次の幕ですが、こゝは十津川の山中。大塔ノ宮が従者二人をつれて、山伏に御姿をやつし給ひ、岩ヶ根枕に御ンまどろみの處へ、討死した片岡八郎が、夢枕に立つて、行先の事ども、御知らせをするといふ一段。

宮の川上眉山は、故人澤村田之助といふ一般の評で、非常に美しう御座いましたが。此處へ出る石橋思案の片岡八郎の亡靈。それが出る時に、いつもの大ドロ／＼で、カケ焰焼では、ドウも改良に成らない。これは化學作用で、不思議な煙を出して見せる。然う請合つたのが、東京藥學校の卒業生で、安川政次郎といふ、今は故人ですが、其頃のハイカラ男。これは「ラヂオ新聞」の田中煙亭さんの親類で、煙には矢張縁があります。

いよ／＼片岡八郎の幽靈が、岩の陰から出ると成つて、おほドロ／＼を打込むと同時に、安川藥劑師は、かねて用意の煙草盆の上に、新聞紙で煙突をこしらえて置いたのへ、發明の藥品を投げ込みました。

すると、餘りに藥が強過ぎたのか。煙でなく、火を發して、忽ちパツと新聞紙が燃え出しました。出掛つてゐた片岡八郎の石橋思案「熱イツ」と叫んで飛上りました。幽靈が足をヤケドしたといふのは、前代未聞。それを後見に廻つてゐた尾崎紅葉が、ビツクリして、揉み消すといふ騒ぎ。

ヤツとそれも、如何やら納まりました。幽靈は引込む。此處へ十津川の野武士野長瀬兄弟が、勤王の爲に馳せつけて來るといふ。その野長瀬六郎を、私が勤めて、七郎の方を岡田三面子が引受け

ました。兩人とも甲冑姿。私は太刀を抜いて持ち、岡田は槍をさげて、威勢よく花道から出て、七三で立留り、互ひに顔を見合せ、うなぎき合せて、直ぐ本舞臺に掛つて、宮の御前に「お迎へ」と言上する。一寸好い役で、お囃子の方では、ドンチャンを打込む。カツボン／＼で、先づ私が花道を勢ひ込んでカケ出して、七三で立留つて、後を振り向いて、思入れをしゃうと思ひますと、後からつゞいて來てゐる筈の岡田の姿が見えません。

私は、どうにも、斯うにも、進退谷まつて、花道の出口の方を、氣づかひながら見ますと、揚幕がモゴ／＼して、まるで浪を打つてゐる様で。これは岡田が、小脇に槍を掻い込んで、勢ひよく飛出さうとして、槍の穂先を揚幕へ突込んで了つたので、それが容易に抜けない爲に、大トチリといふ譯で。

元來この南北朝時代には、槍は未だ無かつた筈で。古實の上から論じても必用はないのですが、どこまでも槍を捨てないで、いつまでも揚幕と立廻りをしてゐる。つまり、ヤリクリが出来なかつたので。

一方私のテレさ加減と云つたら有りません。最初からユツクリ出たのなら構ひませんが、勢ひ込んで駈出して、七三でその儘立往生。仕方がありませんから、捨ゼリフを云つてゐる處へ、ヤツと岡田が出て來ました。シカシ其爲に私は命拾ひをしましたので、一緒に出てゐたら、揚幕の代りに私が突き殺されてゐたかも知れません。

それから種々有つて、いよ／＼宮の御供して、イデ勇ましく出立なさんで、日の出になり、賑やかな鳴物、皆々引張りの見得で、幕。尾崎紅葉が狂言方へ廻つてゐて、チョン／＼と柝を入れ

ましたが、いくらチョン／＼やつても、幕を引く者がありません。すべての役割は出来てゐたので、幕を引く役だけが、忘れられてゐたのでした。

これは大變だと、體の明いてゐた巖谷が飛出して、いきなり幕を引きましたが、あまりに周章でたので、舞臺から見物席へおツこつた。

それでも一生懸命ですから、落ちたまゝで幕を引切りましたが。前にゐた見物は驚きました。何んでも二三人は蹴飛ばされたといふ事です。

それから二番目ですが、これは九州の豪族、蒲池左衛門といふのを、龍造寺山城守が悪たくみ、能の興行に事よせて、招待して、狂言半ばに斬り殺す。蒲池の一子宗虎丸といふのが、家臣清三郎の住家に、女に化けて隠れて居り、盆踊の夜に敵を討つといふ筋。

序幕の能舞臺の場では、觀世清廉の地で、丸岡九華が、お得意の屋嶋を舞つたので、これは大成功。此所で蒲池左衛門に成つた私が、一太刀肩先を斬られました。それで次の幕の城の外では、肩先に赤い綿——血綿を縫ひつけて、手負ひに成つて出て、捕手を使つて一寸立廻りがありました、トマ一息の處へ、岡田の扮した家郎の清三郎が、駆付けて來まして、それに遺言をして、切腹するといふ、大儲けの役なんです。篠入りの合方で、好い心持にやつてゐながら、フト氣がつかますると肩に縫ひつけてある血綿が、立廻りの騒ぎで、胸の處まで落ちて來てゐました。

打ちやつておけば好かつたのですが、ツヒ氣に成りますから、ソレを肩へ持つて行つて引懸けましたので、見物がドツと笑ひ出しました。——血をかついだといふので、かんじんの愁嘆場がメチヤクチャ。

それから次の幕は、清三郎の住家といふので。この幕明きに、權助がわらちを造つてゐる。村の娘二人が遊びに來てゐる處へ、庄屋さんが來て、今夜の盆踊に、龍造寺山城守が、忍び姿で見物に來るといふ筋を賣つて、娘達と共に歸つて行きます。それを見送つた權助が。

「ドリヤ、私は奥へ行つて、午睡でもしやうか」と奥の間に入るんですが、此庄屋が紅葉で、權助が石橋です。

石橋の頭は有名な大頭なので、權助で出るのに髪が小さくツて、如何しても納まりません。石橋の方は納まつてゐても、髪の方が納まらないので、それを寄つて集つて。

「何んでも好いから冠ツ了へッ」

「冠る氣でも冠れないんだよ」といふ。

「何、冠れない事があるもんか」てんで「痛いよ／＼」といふのも構はず、皆んなで無理に冠せようとしたので、床山が驚いて飛んで來て「鬘の臺金が曲りますから、ドウかそればかりはかんべんして下さい」といふ譯。

それで大森鬘の方なら、イクラ開いても差支へないといふので、ヤツとそれを冠せたのですが、それはホンののツかつてゐるといふだけで。その頭で以て「ドリヤ奥へ行つて、午睡でもしやうかえ」で、中央の暖簾口へ掛つたのです。

こゝは總べて書割なので、出入りは出来ない事に成つてゐるのですが、石橋は近眼ですから、ツレが分りません。イキナリ頭の先で、暖簾を掻き分け様とすると、背景にブツかつて、コッーン。辛うじてのツかつてゐた大森鬘が、忽ち轉げ出したので、見物總立に成つて喜びました。

石橋ほモウ上つて了つてゐますので、未だ書割の暖簾に、頭を突込ふとしますので、後見の私は仕方がありませんから「イケない」と留めますと「おれの入る處はドコだ」と大マゴツキ。ヤツと上手の出入口へ連れて行つてやりましたが、これが當日第一の御愛嬌。

こゝへ、娘に變装してゐる蒲池左衛門の一子宗虎丸。コレは巖谷の役で、鳥田鬘。石持の萌黄地に、露草の染小袖。大層美しく見えました。如何にせん、袖の内に手先を忍ばせる心得がなかつたので、書生流にニュートと手を出して居りますので、これでは如何しても男です。それでも御最負は有りがたいもので、女に化けても男の魂を忘れない處がエライなんて、好評で御座いました。清三郎は岡田朝太郎で、この方が兄といふ事に成つてゐるのですが、巖谷は丈が高過ぎる方で、岡田は丈が低く過ぎる方。妹の方が兄よりズツと背が高い。そこがお芝居です。實際なら直ぐ化の皮が剥がれたでせう。

四幕目の盆踊の場で、これは樂屋總出で、チン／＼テンレン、トツツンシヤンラン／＼皆練習を積んで居りましたが、これが途中から俄の夕立で、踊り子が上手下手へ散亂する。そこへ敵の龍造寺が、深編笠で出て來るといふ段取りですが。皆踊りに夢中に成つて、ナカ／＼散亂致しません。

この時、前の藥劑師の安川といふのが、又しても例の化學的作用で、電光を見せるといふわけで敷疊の中へ隠れて居りましたが「どの邊でピカ／＼やつて好いか僕には分らない。宜しく合圖を頼む」といふわけで、それで私が踊りながら「稲光々々」と言ひましても、一向ピカ／＼やりません。これはその安川藥劑師、耳が餘程遠いんですから、踊りのチン／＼テンレンに搔消されて、全く聴え

ない結果なんで。

そこで先頭に立つて踊つてゐました紅葉が、氣を利かして「夕立だい／＼」と怒鳴りながら、眞先に逃げ出しましたので、澁々ながら一同退散。

いよ／＼龍造寺山城守が出て來て、それに宗虎丸の巖谷が、娘姿から引抜いて、鎖り帷子に白装束。この場の巖谷は非常の大出來で、龍造寺との立廻りよろしく、そこへ岡田の清三郎も駆付けて目出たく親の敵を討つのですが。その龍造寺に成つたのが多田漁山。ナカ／＼急に死にません。兩足を大きく割つて、孤空をツカンで苦しむ思入れが、非常に長い。それは未だ好いのですが、あまりに足を割りすぎて、聊か醜態を演じかけましたので、急いで二人掛りで、無理遣りに多田漁山を

打倒して了ひました。

すると後で漁山が大不平「僕は醫科大學生で、今年卒業すれば醫學士に成る者だ。人間のだんまつまを研究して、芝居の死の方に一期限を割さうとしてゐる處を、二人で無理に押し倒すといふ法があるか。抑も人間といふ者は、さう簡單に死ねるものではない。『生理學の講義を始める』といふ騒ぎ。

扱て首尾好く敵を討つて、宗虎丸の巖谷



文士劇の衣装

が、龍造寺の首を斬つて、月の光に翳さしながら、岡田の清三郎と渡りゼリフに成らうといふ大事な處。その龍造寺の首が、小道具の方からは、坊主首のまゝ受取つて有つたので、鬘が冠せてなかつたのです。

今殺されたばかりの龍造寺が、首を斬られるとモウ坊主に成つてゐるなんか、イクラ演劇改良でも、あんまり早く手廻し過ぎて、どうにも成りません。

度胸の好い巖谷も、之には困つてゐましたが。已むを得ず袖で隠して、どうやらその場をつくらひました。

それから大切の『八人男』この衣裳は白地へ、武内桂舟畫伯が、暮の忙しい中にも拘らず花鳥風月を書いて呉れました。八人ぶりですから大變で。裾の處へ、馬琴、種彦、京傳、一九などの印譜散らしを書きましたのは紅葉で、幸ひ私の分は、今も猶保存してありますが、八人揃つて着て出たので遠目では大層綺麗に見えたさうで。けれどもコレは皆金巾で。

座頭の尾崎紅葉が最後に、大百を冠つて、堂々と押出したのは好いのですが、紺足袋を脱ぐのを忘れて、花道へ出て、それと氣が着いて、急にソレを脱いだのを見つかつて、ドツと來たといふ。これが失敗の打留めで。斯く、失敗談ばかりお話し致しますると、普通の素人芝居と同じであります。シカシ我々は、一番目に、忠臣の討死を演じ。二番目に、孝子の仇討を出しました。それは今日では、古い思想かも知れませんが、興行禁止を食ふやうな、甚だ物騒な脚本を用ゐなかつたといふ事だけは御了解を願ひます。

斯うした最初の文士劇の仲間で、尾崎紅葉が一番早く此世を去りました。川上眉山も亦あとから

つゞきました。未だ其時の一座の者が、二三人はなくなつて居ります。更に最近には、石橋思案が突然逝つて了りました。私が此話を放送するといふ事を、石橋は楽しみにしてゐてくれたのでしたが、惜しい事を致しました。もう後には、硯友社の者としては、幾人ものこつて居りません。この次ぎは、ドウも私らしい御座いますので、今の内に昔の失敗話、若氣の至りで、馬鹿な事を致しました、その懺悔を、今夕ラヂオに依つて、申上げた次第で、今より三十七年前の夢。まことに他愛のない話で御座いましたのは、どうか幾重にも御ゆるしを願ひます。失禮。

## 明治文壇逸話

(昭和二年十一月五日午後七時二十五分より——東京放送局にて)

七たび人間に生れて、文章を以て、皇恩に報いる。これは皆様御存知の『金色夜叉』の著者尾崎紅葉山人の遺言で御座います。

七たび生れ變つて文章報國……併し之は決して、尾崎紅葉の專賣特許ではなく、明治時代の文士といふ文士は、大概皆この意氣組で。文章報國。誰しも一樣に心掛けて居りました。

然らば、今の文士はドウか。大正から昭和へ掛けての文士にして、果して文章報國の精神が……？ イヤ、それはもう、ドナタにも、皆愛國の感情は、充満してゐらツしやるので、決して明治の文士に劣つてはゐられないので御座いませうが、中には、ソんな考へを持つてゐるのは古い。藝術

に國境無し。藝術の爲の藝術である。所謂藝術至上主義。それから、戀愛至上主義だなんて、そんな事を唱へ出して、イヤ唱へるだけでなく實行までして、それが爲にドンな悪影響を、國家風教の上に及ぼさうと、恬として顧みない人も、二三有つた様に見受けます。誠にニガ／＼しい次第で御座います。

議論めいて恐れ入りますが、兎に角明治時代の文士は、犠牲的精神には皆富んで居りまして、自己一人の慾望に對しては、存外淡泊で御座いました。

しかし、有體に申しますと、明治の御代には、文士なんか甚だモチませんでした。作家自からも謙遜をして、戯作者——戯れに作る者と呼んでゐました位で、私が十六七、則ち明十七八年の頃には、未だ新聞小説の如きも、單に續き物と申しまして、七五調の文章で、お屋敷騒動とか、或は敵討物とか、極、低級な創作で。けれども其社会的地位から考察致しますると、トテモ今日の文士諸君ほど、お高きはなかつたので御座います。これは併し無理も有りません。國家としても、文學なんかに構つてゐる餘裕が有りませんので、詩を作るより田を作れで、軍備は申すまでもなく、殖産にも、工業にも、通商にも、其他それ／＼に保護獎勵を要する次第で、それを放棄して置いては、歐米の進歩から益々置去を食ひまするので、全力を盡して其物質方面を保護し、且つ獎勵してゐた場合でありますから、文學とか、美術とか、さうした思想の糧食に就ては、全然放棄されてゐたのは、是非もない次第で御座います。従つてヒヨロ／＼した青い顔の文士よりも、日にヤケた兵隊さんを、一人でも多くこしらえた方が好いといふ、然ういふ時代で御座いました。

ですから、その時分に、今の様に、文學者と成るのを志願しますると、それは悉く不評判で、丸

で異端者扱ひを受けますので。

現に、私なんか、一人の叔父から、晝カキに成つたり小説書きに成る様な了簡なら、腹を切つて死んでへつてんで、おほこいとを食ひましたが、まア腹も切らずに、どうやら、小説家に成りましたが、之は今日から考へますと、幸か不幸か分りません。然ういふ様な次第ですから文士といふ者が全く一般から認められて居りません。その結果として、當然、皆、物質上には恵まれて居りません。原稿料なんかメチャ／＼に安う御座いました。

こんな事を申上げると、下卑ますけれど、二十行二十字四百字詰の原稿一枚が、やうやく二十五錢位。五十錢取れば大家の方で。ソレが今日では一枚が百圓。但しソレは私の原稿料ではない、他の流行の新しい作家ので御座いますが、イクラ物價が高く成つたとは云へ、大變な相違。實に明治の文士は哀れなもので御座いました。

そこへ行きますと今日の文士方は、皆エライ。鼻息がナカ／＼荒う御座います。物質上にも恵まれてゐるが、戀愛上にも恵られてゐる様です。

噂によれば、今の或る文士は、堂々たる邸宅を新築しました。或る文士は自動車を買ひ込みました。但し運轉手に給料を拂はないで、逃げられたとも聞きました。又或る文士は貸家を澤山建て、家賃の上りでタンデキして、それを材料に小説を書いて、又儲けたとも聞きました。更に又或る文士は、若い燕、ではない、若い七面鳥を飼つてゐる。それに逃げられたり、戻られたり、老いて益益盛んだつたとも云ひます。これは少々時効には掛つてゐますが。

ところが昔の文士はと云ひますと、大概は借屋住居、或は下宿屋に燻つて居りました。

紅葉の牛込北町の家賃は、僅かに四圓、勿論物價も總じて安う御座いましたが、明治時代の花形文士が四圓の借屋住居。死ぬるまで住みました横寺町の家も、矢張借屋で御座いました。

そののみならず紅葉の祖父——おぢいさんは、手内職をして居りました。それは退屈晴らしの爲ではありませうが、何んにしても明治文豪の祖父に當る人は、手内職をして居りました。アノ寒暖計——氣温器の目モリを、一々細かく付けて居りました。

尾崎君の家庭の内情を打明けて、私自身が口を拭いてゐては相済みませんから、お恥かしい話ですが、事實を有の儘に申しますると、私の母親は、人様の縫物、——賃仕事や、それから、足袋の甲ハゼを附けるのを、内職にして居りました。足袋は人の足に穿くものだから、止して下さいと云ひましたが、新らしいのだから綺麗だと云つて、止しませんでした。これがまア明治文士の家庭の真相です。

——しかし、この世話場に於ては、私なんかよりズツと上の人が御座いました。それは昨年死去しました廣津柳浪で、此人は紅葉露伴と並べてもよい、二人とは又別方面に進んで、深刻な小説を書いた大家。其人の窮乏時代には、机が無かつたので、蜜柑函をヒツクリかへして、其上で原稿を書いたといふ。それでも傑作は出来たので御座います。

それから山田美妙齋、この人は明治文壇史中、重要な位置を占めなければならぬ人で有りませんが、今日に至るまで、一向に未だ報いられて居りません。誠に氣の毒な事ですが、勿論それには多少の過失が有りました。でも今日の文士の或る者が、公然道徳を蹂躪して、シカモそれを得意にしてゐるのに比べますると、山田美妙のは何んでも無いと云つても好い位の、軽い／＼過失でし

た。それが爲に文壇から葬られて、晩年には可成り寂しい生活をして、あはれな臨終を遂げました。

この山田美妙といふ人は、何處へ行つても、外套を脱いだ事が有りません。座敷へ通つて主人と相對しても、外套は着たまゝで、コレは併しソレを脱ぐに忍びなかつたので有りまして、寧ろ着てゐる方が失禮でない位に、下の服裝が怪しかつたといふ事です。

永年仲違ひで有つた紅葉を、美妙の方から初めて訪れました時にも、外套を脱がなかつたので、ソレを紅葉は、ヒドク氣の毒に思つて居りました。

明治文士の貧乏話なら、未だイクラでも御座いますが、それは人様の事を如何してもスツバヌク事に成りますので、餘り宜しく御座いません。ト云つて自分の事を申上げると、自己宣傳になる。だが、貧乏の自己宣傳なら、別にヘイガイも有りますまいから、代表的の處を一ツ申上げますと、忘れもしません。明治二十六年の、大晦日の前夜です。其頃は東京の牛込に住んで居りましたが、赤貧洗ふが如しで、イヤモウ押詰つてから、ドウにも斯うにも成りません。で、實は門松を買ふ事も出来ません。

『門松は止ませう』と私は母に云ひますと、母は、何とも云へぬ、暗い顔になりまして『江見家の代々、門松無しでお正月を迎へた事はあるまい』と云ひました。けれども實際、どうする事も出来ませんでした。

その夜も更けて、私は迎も睡れません。机に凭れて、賣れるアテもない原稿を書きました。其方が氣が紛れます。それはその貧窮の事實を、日記でもなく、小説でもなく、事實有りのまゝに書きながら、ツク／＼考へました。それは、到底文學上の勞作に對して、物質上の報酬は得られるもの

ではない。それならソレに代つて精神上の慰安、たとへば讀者の反響とか、批評家の推薦とか、さういふ物が有るかといふと、それも無い。有るものはバリザンボウ。出版業者とか、新聞の主筆などからの、無理解の攻撃で、江見君には困ると尾崎君の處へ、タビ／＼尻が來ました。散文で詩を書いてゐる短篇小説なんか、悉く不評なんです。斯う考へて來ると、モウ寝ても立つてもゐられません。發狂か。自殺か。それより他に無い位に考へ込みました。

すると其夜更に、門口で何やら物音がします。コツ／＼打付ける音。何かと思つてチツと耳を傾けますと、それは母が、何やら打付けて居りますので、驚いて出て見ますと、貧弱な小さな松の枝を、入口の兩脇に、小石で以て打付けてゐるので有りました。

母は親類へ行きまして、少しばかり都合して参りまして、市の賣残りの枯れかゝつた小松を二本買つて來て、それを門松にするのと分りました。素より鐵槌が有りませんから、小石を拾つて、入口の柱へ釘付けにしてゐるので有りました。其時私は、葬式の時に、棺のフタを小石で打付けます。アレを連想して、何んとも云へぬ悲哀を感じました。

私は此音を、今でも思ひ出しまして、自分の頭の天ツベンに、小石で釘を打込まれる様に、強く強く感じるので御座います。

話が餘り沈んで來ましたから、同じ貧話でも、御愛嬌に成るのを申し上げますと、今の文士は、自動車を持つ位の勢ひですが、昔の文士は抱へ俵を持つてゐる者は、殆ど無かつたと思ひます。

處が又、それを有る様に見せたがつて、お抱への車夫に自用の俵といふ體采をつくつてなんか、見得坊がどう御座いました。

齋藤緑雨なんか、俵で一日乗り廻はすのが道樂で……それから原抱一庵、これは又行先々で、車賃を拂はせる。其呼吸なんて實にウマイものでした。

私なんか無論その一人で、それで芝の紅葉館あたりへ威勢よく乗り込んだもので有りますが、イクラ抱への車夫と見せかけても、行つたたび毎に紋が違ふ。車夫のハツピの紋や、提灯の紋が、行つたたびに變つて、丸に二ツ引かと思ふと其次には下り藤。さうかと思ふと抱き茗荷に成るんですから、具合の悪い事おびたしい。

それでイザお立ちと成ると、女中達が皆揃つて、大玄關まで送つて出て『何々様お供』と呼ぶと、二頭立の馬車とか、自家用定紋の俵が、直ぐと玄關前へ來るんですが、我々では然うは行きません。その邊で拾つて來た車夫ですから、江見様だか、海老様だか、知れアしません。イクラ呼んでも來やアしません。こんな失敗はタビ／＼演じました。

一體われ／＼文士が、貴族や豪商の倶楽部の様な紅葉館へ行くのが間違つてゐるんですが、それは『讀賣新聞』と紅葉館と、一寸關係がありましたので、それに實は、存外お安くも有りましたので。

後には、石橋思案が發頭人で、歩行會員といふ、つまり決死隊を募集しまして、歸りは歩くを極めました。いろ／＼御馳走を食べたので、腹が張つた。運動の爲に歩かうぜといふ。そんな口實を設けて、女中達の前を胡麻化して、玄關を出るやうな始末。それで芝山内から、西ノ久保へ出て、虎ノ門から霞ヶ關を上つて、半藏門から九段へ出て、牛込見附、隨分有りますが、ソレをテク／＼歩きました。巖谷は平河町ですから、一番近いが、それに次いで武内桂舟畫伯が四番町。尾崎だの

私は牛込で、石橋と成ると小石川の金富町ですから、又遠方です。途中で夜明しの鍋焼うどんなんか食ひましたが、貴族的の紅葉館を出る時には、腹ゴナシの運動だと云つて出た連中が、直ぐ西ノ久保で鍋焼うどんを食ふなんか、理屈に合つて居りません。

後にはソレでも尾崎だけは俾を新調致しましたが、車夫はといふと、通ひで、まア半抱へといふ風で。處が、紅葉館の歸りに、車夫諸共狐につまゝれて、同じ處をグル／＼廻つてゐて、折詰の魚を取られたといふ珍聞も出来ました。

狐が果してツマンだのかドウか、それは研究物でせうが、同じ處を夜通しグル／＼廻つてゐたのは、本統の話で御座います。この車夫は未だ達者な筈です。

まア斯うした具合に、我々は一方に於て、随分ノンキな遊びも致しましたが、併し明治時代の文士としては、未だ曾て一人も、道徳を破壊した者は無かつたので御座います。

然るに今日では、舊道徳の破壊を叫び、ソレなら、どんな新道徳が出来たかといふと、そんな物は持つてゐない。唯自己慾——自分勝手のみ考へて、如何に風紀が紊亂に及ぼうが、人心が廢頽に傾かうが、恬として省りみず。ドンな非常識を演じやうと、それは文士の特權である。何をしても自由である。自分が自分の意志の満足のまゝに動く。これは文士としての特權であると、無闇に特權を振舞はず。氣違ひが銃劍で暴れるより未だわるい。そんなのは、まア、タントは無いのでせうが、ソレを容認してゐる文士は澤山ある。新らしがつてゐる文士は大概然うでせう。均しく是 陛下の赤子で、國民皆一樣に均等の權利を有すべきで、文士だけが特權を有するなんて、そんな不合理な事があるわけのものでは御座いません。それを若い人達が主張するのなら未だよろしい。所謂

若氣の至りで、今に目も覺めませうが、既に中年、若しくは老年の文士にして然り。とすれば、もう目の覺め様が有りません。實に困つたもので、始末に了へません。

前にもたび／＼申述べました如く、明治の時代は國家多事で有りまして、事實文學に注目するだけの餘裕が、政府にも社會にも無かつたので御座います。全く繼子扱ひにされましたが、それでも我々文士としては、明治大帝の御聖徳の下に、其御代の民草の一分子である事を光榮として、コツ／＼として、文章報國を勵みました。

その當然の結果として、或者は陋巷に窮死しました。或者は自殺して果てました。

さうした、寂しい最後を遂げてはゐますけれど、その作物は必らず後の世に於て、冷く人に眞價を認められ、萬代不朽の作としてのこされるものと、安心して死んで行つたでせう。

が、果してその死後に於て、最期の希望が達しられたで有りませうか。達し得られたとしまして、それは幾人もないだらうと思はれます。

嗚呼、何んといふ悲惨な文壇の戦ひでしたらう。大正昭和の文壇隆盛なる今日の如き、その基礎をつくる爲に、犠牲的戦死を遂げた無名の文士。城のお堀の埋草と成つた雑兵の屍こそ、あはれにも貴とき物ではありませんまいか。遠き外國の文豪の追悼會が、お祭騒ぎを以て日本の文學愛好者の間に聞かれるとか、聞かれたとかいふ事で、至極結構では御座いますか。御手近の日本の文士で、悲惨なる犠牲的死を遂げた人達が、文壇的に祭られたで御座いますか。如何で御座いますか。私は餘りに現代の文壇が無情だと存じます。

けれども、亦飄つて考へますと、早く死んだ人の方が未だ幸福で。同じ雑兵でも、さん／＼の手



キズで、半死半生虫のイキ、實に死んだ友達を羨ましいと存じます。

イヤ、いつの間にやら、手前の愚痴話に移つた様で。しかしコレは決して私の聲では御座いません。遠き十萬億土から、ラヂオを通じて明治の文士が叫んだので御座います。どうか皆様、現代の新らしい文士の著述ばかり御らんになれないで、亡き人々の著述に就ても、御愛讀を賜はつて、公平なる御判讀を願ひます。失禮致しました。

この放送は最も強烈な反響を得た。歸宅すると間もなく、故某文士の未亡人が、初めて自分を訪問されて、感謝の涙に咽べたのも其一つ。

この材料に、少し手を入れて、昭和三年三月二十八日、大阪。

同四年一月十九日、名古屋にて、各放送。

## 文士の今昔

昭和三年八月十八日午後七時十分より——仙臺放送局にて。

お暑さの折柄ですから、餘り肩の凝らない程度で、涼しい、新らしい味の有るお話を致したいと存じます。併し、何分私は、古い人間で、文士の中でも骨董品に屬しますから、新らしい思想なんか持合せて居りません。肩の凝るやうなムツカシイ智識を持ちません。已むを得ず昔の文士生活、明治時代の思出話を放送させて頂きます。(中略)

以上の状態で御座いましたので、當然明治の文士は、物質上にも恵まれて居りません。經濟上の事を打明けますのは、賤しい様で御座いますが、眞の内幕を語るには、コレも必用と存じます。明治二十三年の頃の原稿料は、一枚が二十五錢位。五十錢取れば大家です。二十行二十字で四百字詰の原稿一枚が二十五錢。一字イクラと計算して見ますと、一字が一厘六毛。

それが大正から昭和の御代に成りますと、最低一枚三圓位、五圓、七圓、十五圓、中には一枚百圓といふのがレコードで。勿論この百圓取つたのは、新らしい作家で、我々古手に至つては一向昔と變りません。ト云つてマサカ、一字一厘六毛でもムいせんが。

然ういふ次第で、今の文士は幸福で、殊に圓本の全集物に首を突ツ込んだ人達は、一躍成金に成りました。或る文士は廣大なる邸宅を新築する。或る文士は別荘を建てる。或る文士は貸家を澤山建て、家賃の上りで藝妓買ひをして、それを材料に小説を書いて、又儲ける。それから自動車を買つて乗廻はす。但し運轉手の給料を拂はなかつたので、逃げられたといふ話も聽きました。

明治時代の文士は、トテモ自分の家に住むなんて御座いません。親掛りでない限りは、大概借屋住居。或は下宿屋住居。

借屋でも十圓以上のは御座いません。當時第一流の尾崎紅葉でも、有名な『金色夜叉』を書いた時分、牛込横寺町に借屋をしてゐて、たしか一月が七圓五十錢。物價も安う御座いましたが、明治の大文豪が七圓五十錢の家に住んで居りました。

それで明治三十二年頃には、別に又一軒、近所に安い家を借りて、そこへ書生を大勢置きました。泉鏡花だとか、徳田秋聲だとか、小栗風葉、柳川春葉、未だ此他に三四人。

これ等は稼いで食料を入れる筈で御座いましたが、筈が筈だけで、一向誰も入れません。デモ紅葉は皆を可愛がりました。

さうして成るべく皆んなに、ウマイ物を食はしてやれ。ウマイ物を食はなければウマイ小説が書けないといふ。これは紅葉の主義で、自分も盛んにウマイ物を食ひましたが、度を過ぎた結果か、胃痛に成つて、三十歳で死にました。

私達の仲間では、紅葉の原稿料が一番高い。それに「讀賣新聞」に入社をしてゐましたので、裕福とまでは行かないまでも、さう困る事も無いだらう。質を置く、七ツ屋へ駆付けるといふ事なんか無かつたらうと、つひ此間まで私は信じてゐましたが、先日泉鏡花の弟で、矢張文士の泉斜江、この人から聽いて驚きました。矢張、七ツ屋へプチ込んだ方で。

けれども、其質を入れるにしても、他の文士のは、遊ぶ金が足りないとか何んとか、そんな場合が多かつたのですが、紅葉のは然うではありません。前にも申しました通り、書生達にウマイ物を食べさせるといふ。さういふ場合に奥さんが、賄費の欠乏を訴へて、已むを得ずウマイ物が買はれないと答へられた時に「ソウか、それなら質でも置け」

筆筒を空にしても書生にはウマイ物を食はしたといふ、此紅葉のイキが、今の文士の中に有りませうか。

世間では紅葉の生活を、非常に贅澤の様に、非常に豪華なクラシをされた様に誤解した者が多いので、既に昨年あたりでしたか、某雑誌に、田山花袋の逸話が、面白く書いて有りました。それから花袋自身も、自分の著書の中に書いてゐる様に記憶しますが、田山が未だ書生時代に、初めて紅葉

を訪問した處が、紅葉は美しい細君を持つてゐて、友禪縮緬の立派な座蒲團の上に、傲然として、乗つてゐた。その友禪縮緬が深く印象されて、自分も早くアンな座蒲團に乗つて見たいと、それから發奮して、今日の田山花袋と成つたといふ。これを春秋の筆法で云ひますと、紅葉の友禪縮緬の座蒲團、今日の田山花袋を作る、とでも云ひませうか。

これは併し大變な間違ひで、友禪は友禪でも、縮緬ではなく、メリンスで、私達は能く知つてゐます。たしかに縮緬ではなかつたのです。けれども、田山は近眼でもあり、又書生時代の世間馴れない所以もあり、赤くツて綺麗な模様が附いてゐれば、何んでも友禪縮緬だと思つたのでせう。まあそんな程度で御座いました。

それから此貧乏といふ點だけなら、紅葉よりも大家がイクラも有りました。同じ硯友社の中でも先日死去なりました廣津柳浪、これは露西亞風の、陰鬱な、深刻な、一種獨特の心理小説を書いて、紅葉、露伴と並べれば、どうしても其列に加へなければならぬ其時代の大家として、今日では却つて其息子さんの廣津和郎——カヅヲと讀む——息子さんの方が名高く成つてゐまして、この方を能く御存知で有りませうが、此和郎といふ人が又親孝行で、其父たる柳浪翁の、その病中から葬式まで誠に行届いて能く世話をされましたが、此の柳浪處女作の『殘菊』といふのを書いた頃には、蜜柑箱を逆さにして机の代用として筆を取つた。イヤ、そんな事は無いといふ取消も聞きましたが、私が其當時に、或人から耳に入れたのでは、兎に角机の無かつた程の窮乏であつたので、臺所道具と云つても、釜の他に摺鉢が一ツで、その摺鉢で味噌を摺るのは勿論ですが、お米も濯げば、顔までも洗つたといふ、その位窮してゐられても、續々傑作が出来たので御座います。

それから山田美妙齋。この人は、明治文壇史中、重要な位置を占めなければ成らない人で有りますが。兎角不遇で、晩年は殊に振ひませんで御座いました。言文一致の元祖——二葉亭の方が元祖だといふ説もあります。又坪内先生がお始めに成つたといふ事も聞きますが、私はドウも山田美妙の方が早いやうに考へます。この人は、品行の上に、一寸面白くない事が有つた爲に、當時社會からも、文壇からも、忽ち葬られて了りましたので、デモ其失敗がドンな事であるかといふと、今日の如く、道德の標準がズツと垂下してゐる時なら、何んでも無い事で、葬られなんかしなかつたのでせうが。

そこへ行くと今日の文士は幸福です。公然道德を蹂躪し、シカモそれを得意にしてゐる。文學ファンなんか、ソレを又禮讚してゐる。實にナゲカワシイ次第で御座います。

山田美妙が死んだ時に、其葬儀に列した者は、ホンの僅かで、實に、それは、寂しいもので有つたと申します。

生前に西洋菓子、殊にシュークリームが好きで有つたので、それも併し今日の如く、西洋菓子はファンダンには無い時代で、シュークリームが珍らしかつたので御座います。それを、友人の丸岡九華が知つてゐますので、病中、見舞にシュークリームを持つて行つた處が、大層喜びました。

それから三四日して死去しましたので、九華が取りあへずクヤミに駆付けて見ますと、その時のシュークリームが、カビの生えたまま、枕團粉と一緒に子供へしてあつたといふ。まアそんな状態で有つたので御座いました。

明治の文士が悲惨の死を遂げたといふ例ならば、いくらでも御座います『文學界』派の北村透谷。

それから硯友社の川上眉山。或は又原抱一庵。以上は變死を遂げた一例で御座いますが、彼の齋藤綠雨、江戸文學、皮肉文學で文名を轟かした齋藤綠雨なども、病氣で死んだとは云へ、可成り悲惨な死方をして居ります。

前の自殺した文士達の、その死の原因は、哲學上の懷疑の行詰りとか、或は思想のコンガラカリとか、然うした方から來てはゐますが。しかし、物質上に於て、毫も報はれてゐないのは事實で御座います。

明治文士の貧乏話なら、深刻なのが未だイクラでも御座いますが。餘り人様の事ばかりスツバ抜いては、宜しく御座いません。と云つて、自分の事を申上げると、自己宣傳になる。ダガ、貧乏の自己宣傳なら、別にヘイガイも有りますまいから、代表的の處を一ツ告白して頂きます。

明治二十八年、その頃私は、江の島手前の、片瀬に住んで居りました。書生ばかりの男世帯で、亂暴を極めて居りましたが、夏に成りまして浴衣一枚ギリ。それも洗ひさらしの安物で。

處が、一里足らず隔たつてゐる鷗沼の海水浴場。その旅館の主人から、初めて招待をされました。御馳走は結構だが、着て行くキモノが有りません。

そこで工風をして、海岸傳ひに歩いて行くのを止して、廻り路にはなりますが、海の方から船で行く。その船に浴衣掛けに乗つて、自分で船を漕いで行けば、わざと洒落にと船頭氣取りで來た。面白い趣向だに向ふでは買冠るだらう。之に限るといふので、書生を一人連れて、船で出掛けました。

この船は川船で、片瀬川を乗り廻すには適當ですが、海へ出るのは冒險です。けれども、それよ

り他に方法が御座いませんで、乗出しました。

すると海上で、横浪を食つて、船は見事にテンブクしました。二人は、まア泳いで上陸して、命だけは助かりましたが、浴衣はズブ濡れで、仕方がありません。

もう鵜沼は近いので、御馳走が鼻の先にブラ下つてゐるのに、空しく引返へすのも残念千萬。思ひ切つて二人共、ハダカで以て海水旅館へ参りましたが、その門口には紅白の旗のぼりが澤山立つてゐて「歓迎江見水蔭先生」なんて書いて有ります。

その歓迎される當人は、ハダカで下帯まで濡れて居ります。旅館の方では、當時の流行作家ですから、どんな氣取つた扮装で乗込んで来るかと、女中達も總出で待構へてゐますと、ソレがハダカなんで。浴衣を兵子帯で縛つて、手にブラ下げてゐるのからボタ／＼雫が垂れてゐるんですから、大概驚いて了つたやうです。ハダカで客に呼ばれて行くなんて、殊更に奇を衒つたやうでもありませんが、事實已むを得なかつたので。

これも其夏の事でございましたが、尾崎紅葉が書生二人連れて避暑に來ました。今の文士なら、立派な一流旅館の一部を借切るとか、別荘を買つて治まつて、活動撮影機でも買ひ込んで、モガモボの海中亂舞を撮影して誇るのでせうが、その頃の第一流作家としての尾崎紅葉は、貧乏文士江見水蔭の處へ居候です。書生は小栗風葉と柳川春葉との二人。

私の家にも書生が三四人ゐましたので、まるで土方部屋も同然で。

と、近所の漁師の子供が大勢で、近くの砂原で南京花火を打合つて、戦争ごツ子。ちやうど、日清戦争の有つた後ですから、その眞似で。私は面白いから、書生に南京花火を買はせて、漁師の子

供が占領してゐる砂山を攻撃してやらう。それには松林の間を潜行してナンテ、いろ／＼策戦を講じて居りますと、それを知つた尾崎が怒り出して。

「一體、君はイクツに成るんだ。子供を相手にイクサゴツコなんかして、そんな了簡だから文章が下手なんだ。氣を入れ替へて勉強しなけれアいかんよ」大目玉。

然う云ひ放して彼は午睡をしましたから、私はソツと内の書生を連れ出して、松林の中を進んで行きますと、向ふの砂山に、紙の旗を澤山立て、子供が十五六人もゐましたらうか。ボン、バチン、ボン、バチン、南京花火を盛んに打つてゐます。

「アレが平壤の牡丹臺だぞ。さア此方からも打テ——」

どうも大人だけに大きな形を見せて、子供と南京花火の打合ひをするまでには徹底が出來ませんから、松の木に身を隠して、ボン、バチン、ボン、バチン、好い氣なもんで。

すると子供達は、意外な方面にお相手が出來たので、喜びまして、こちらに向つて一齊射撃を始めました。と突然、その子供の軍隊が、悲鳴を擧げて、蜂の巢へ火をつけた様に、砂山から逃げ散りました。

戦況から見ると、江見軍の方が、人数は少なし、不利であるのに、どうして子供が不意に散亂したのかと、見ますと、砂山の上に仁王立に立つて、取残したる大旗小旗を、片ツ端から引抜いて『萬歳々々』と怒鳴つてゐる大供。ヘルメット帽を冠つて、ステッキを持つてゐる。それは尾崎紅葉その人で、後には小栗風葉柳川春葉の二人が、極りわるさうに附いて居りました。紅葉は密かに砂山の後へ廻つて、不意に突貫して、砂山砲臺を占領したわけで。

『子供を相手にイクサゴツコ、君はイクツに成るんだい。だから文章が下手なんだ』なんて、散々私を罵倒した當人が、大人気なく子供を追ひ散らして、紙の旗を分捕つて了つたので。

これは先生、午睡をしかけた處が、南京花火の音が、如何にも面白さうなので。つひ釣り込まれて自分もイクサゴツコの仲間入りをしたわけで。此所に紅葉の詩人肌が見えるのです。眞面目な顔をして、自然に滑稽を演じる。興に乗じると脱線する。此所に紅葉の特性が見えるので御座います。

然うして紅葉は紙の旗を引抱へて、凱旋しまして、例の達筆で『砂山之役これを分捕る』と書いて、庭前に立てましたが、モシ其紙の旗が今日まで、誰かの手に残つてゐれば、たしかに珍品だと思ひます。

まア斯うしだ具合に我々は、一方に於て、随分ノンキな遊びを致しました。が、併し、明治時代の文士としては、未だ曾て一人も、道徳を破壊した者は無かつたのでムいます。(中略)

イヤ大分話が暑くなりまして、涼風話ではなくなりましたので。サゾ御迷惑と存知ます。老文士の古臭い思出話は、この邊で打切と致します。

仙臺の他に、昭和三年九月十七日、福岡。同四年八月三日、京城。各放送。

## 明治文壇笑話

(昭和六年一月十五日午後五時より——交詢社講演會)

お正月の十五日、お目出度い折柄でございますから、成るべくお笑ひになりますやうな材料を申し上げたいと思ひます。勿論むつかしい文學論となりますと、淺學短才、逆も私の任でございます。併し自分で體驗致しました明治時代の文壇を中心としました種々の、先づ、逸話。それなら可成材料を持つてゐますので、然うしたお笑ひ草を、提供したいと存じます。其中でも成るべくお笑ひになるやうな材料を選びまして申し上げます。

能く申しますが、來年のことを言ふと鬼が笑ふと云ひますが、人間未來を夢見て居る間は洵に結構な事で、過去を語り、又昔を語るといふことは甚だ悲哀であります。年寄の繰言は餘りよいものでございませぬ。殊に死んだ友達のアラを捜して、それを遠慮なく申上げるといふことは、大いに禮を失するわけで、甚だ怪しからぬやうでございますけれども、大分明治文壇の事實といふものは誤解されて傳へられて居るやうでございますから、事實を事實として、ほんの生一本のお話を申し上げます、本當の話を申し上げますと思ふ。それは猶更以て悪いことかも知れませぬけれども……。

明治文壇と申しますと、どうしても坪内逍遙先生を第一に擧げなければなりません。けれども先生の御事業は、餘りに著名でありまして、皆様も能く御承知であります。先生が春の舍おぼろと謂

はれて『當世書生氣質』を初めて發表されました時は、實に讀書界を驚動させたもので、其やうなことは今日は申上げるまでも有りませぬ。此坪内先生には、後には澤山の門下が出来まして、所謂早稻田派の文士、是はまア非常な數でございませうが、まだそんなに殖えませぬ、ズツと前、坪内先生が春の舍おぼろとして『當世書生氣質』をお書きになつた當時、先づお弟子と云ふてはチト悪いかも知れませんが、准門弟といふ所が二人出来ました。夫は誰かと申しますと、一人は二葉亭四迷、それから一人が嵯峨の舍おむろで、此二人が先づ門下とは言ひ切れませんが、先生の紹介で文壇に打つて出る事になりました。所が此二人とも、どちらも露西亞文學の研究者であつたと云ふことは、偶然ではございますが、大變面白いと思ひます。其當時は何でも何の舍でなければいかぬと云ふ風で、皆んな雅號を附けるのにも何の舍何といふのが非常に流行りました。例へば松の舍みどり、月の舍まどか、花の舍かをるなんて云ふので有りまして、中には羅宇の舍煙管なんていふのもありました。(笑聲)

坪内先生に前後しまして、最も其當時の文壇を風靡した二人の文豪があります。一人は饗庭篁村一人は須藤南翠、所謂篁南兩大關の時代を現じて居ります。篁村翁は當時の『讀賣新聞』に據り、須藤南翠翁は『開華新聞』後に『改進黨新聞』其方に據つて、共に其時代の新しい小説を紹介されました。それ迄はどうかと申しますと、主に戯作者氣質で、昔の草双紙系統で、爲永春水とか、或は柳亭種彦とか、曲亭馬琴あたりの文脈を引いた、それから幾らも變らない文學が主に行はれました。假名垣魯文とか、高島藍泉とか云ふやうな人が、極く舊式な書き方で書いて居りました。それを稍々新しい形式に改めたのが饗庭篁村、須藤南翠、此二大家で、此功績といふものは、今日では殆ど

忘れられてしまつて居るやうでありますが、洵に遺憾に堪へぬこと、思ひます。篁村翁は確か大正迄生存して居られましたから、御存知の方もあらませうが、非常に酒好きで、極く無邪氣な、洵に良い方でありました。さうして文學の系統は何かといふと、近松物や八文字舍物を主に研究して八文字舍風の筆で明治時代を書くといふやり方で、自笑其碩あたりの筆癖を主に用ひて居られました。まア眞の江戸ツ子でありましたが、自分の書いた物の校正をするのに非常にやかましい。點一つの打ち違ひでも大變な間違ひが起るもので、此篁村先生がひどく残念がつて、一生の怨みであると云つて居られた校正の間違ひがあります。それは本釣鐘の音で之をコーンとあるのが本筋、是はもう極つた事で、百本杭あたりで悪者が獨臺詞に成る處で、淺草の鐘がコーンと響く、コーンでなければ芝居に成らぬ。所が之を校正する人が鐘の音はコーンでなければいかぬとコーンと組込んでしまつた。是が非常に遺憾であると云はれたのも尤ものことで、随分デリケートな所に迄力を盡された。此先生は酒を召上ると益々無邪氣になり、いや無邪氣になり過ぎて、寧ろダランがない位でありました。さうして前がはだかり、或は帯などが解ける、さうするとそれを自分では決して締めないで、一緒に行つて居る若い文士、或は同じ社の人達に締めさせて。自分は御前を以て任じて居られました。是には皆弱つて居りました。其時分の准門下の文士連中としましては、武田仰天子、根本吐芳、黒田撫泉、なんといふ連中でした。

南翠翁の方はどうかと申しますと、是と全然反對な性格を持つて居られました。餘りに立入つたことを申上げては、私の人格を損するのみならず、先生の靈に對して甚だ失禮かも知れませんが、どうも此南翠先生の方は、何と云ひますか、氣取屋の方でありまして、人が訪問をしますと、書齋

を片附けるならば宜しいが、急に取り散らす、色々なむづかしい本を読みもしないのに取り散らして、それから面會をした。そこで、あれは南翠ではない、亂堆だといふ綽名を付けたのが、齋藤緑雨で、此事實を私の所へ手紙で寄越して居りますから、是は確かな事實であります。

それから、是は南翠先生に限りませんが、其當時の文壇では何か英語を一寸使ふと大變偉い作家のやうに思はれた時代でありました。其英語も極く低級な單語を並べたもので、例へば酒のことをワインと書くとか、或は妻と書いて其傍にワイフと片假名でルビを付けると云ふ事が、流行しましたが、それを最も多く用ひたのが南翠先生でありました。けれども先生の書いた『唐松操』とか或は『綠簑談』と云ふやうなものは、其當時の文壇を風靡したほど大變受けたので御座います。

此二人の大文豪を、一人は『改進新聞』に留め、一人を『讀賣新聞』に留めて置くのを惜んで、村山龍平翁が須藤君の方を『大阪朝日新聞』に聘し、鑿庭篁村翁の方を『東京朝日新聞』に、まア早く云へば引抜いたのでありますが、どうも其土地に育つた人は其土地にゐた方が宜いやうで、兩君とも他に轉じてからは餘り芳しいことはなかつたやうで。尤も時代も色々違つて來た關係もありませう。南翠翁が大阪へ行くに就て送別の宴を兼ねて根岸派の連中が旅行をした、其送別の旅行の紀行文を書いたが、それを非賣品の一冊にして『草鞋紀程』とか云ふ名前だと思ひましたが、其送別の旅行の紀行文を持つて大阪へ乗込んで、それを皆んなへ土産として須藤翁が配りました。其配つた本の見出しの所へどう云ふ考へでありましたか、ついまア筆が辻つたのでありませうが『乙夜の覽を賜へ』とか云ふやうなことが書いてありました。乙夜の覽といふことになると、甚だ穩かでないが、それを知らずにやると云ふことになると、須藤氏の學力も大概分つたものだと言ふので、ほ

んの詰らないことでありましたが、どうも大阪方面では須藤氏の名聲はこれ程聞えませんでした。併し假令小さなさう云つたことはありましたが、明治の文壇を語る以上は、第一に坪内先生、それから鑿庭篁村先生、須藤南翠先生、此二先生を除いて語ることは出來ないと思ひます。(福地櫻痴、依田學海兩先生は別格として置きました)此二人を中心にして、森田思軒(翻譯家の大家で岡山の人であります)それから高橋太華山人(是は『佳人の奇遇』を書いた人だと云ふ説があります)が、柴四朗氏の名前で高橋さんが書いたのだとも聞いて居ります。宮崎三昧道人、幸堂得知、幸田露伴、關根默庵、又畫家の方では久保田米僊(今の米齋、金僊二氏のお父さん)それから富岡永洗、斯う云ふ連中が寄つて、會を催して居られました。當時世間では之を目して、根岸派の文士と云ふて居りました。是は硯友社に對して根岸派と云ふことになるのでありませう。此連中は我々よりは無論先輩、年齢も上の方であるし、既に其時に堂々と名前を出してゐた方々であります。扮装などでも大變好い扮装をして居られました。今の若い文士達は一口に硯友社の者を戯作者氣分が十分で甚だ不眞面目である。七偏人、八笑人の流れを汲んで居るから遊戯氣分が多いと攻撃をされて居ります。併し硯友社一派の者を遊戯氣分或は戯作者氣分と云ふが、是を嚴密に論じますと、我々よりは先輩の根岸派の方が餘計さう云ふ氣分はあつた。例へば衣類などでも黒縮緬の羽織とか、或は小紋の着物を着て居る。さう云ふことは、其時分には非常な贅澤でもあるし、又にやけて居りますし、藝人染みた風で、一寸普通の方はやりません。それを根岸派の方の人はやつて居りました。所が硯友社の方の人は、やりたくても出來ない。已むを得ず薩摩緋の羽織と揃ひの着物などを着て居りました。此二つを較べて見ますと、一方を藝人風と云ふならば、一方は書生風、それだけの差があり

ました。

硯友社の連中も内田魯庵、元は不知庵と申しましたが、此人の書いたいたづら書きの『文學者となる法』なんと云ふ本を讀んで見ますと、硯友社の連中がひどくやられて居つて、非常な贅澤な眞似をして居る。硯友社の連中は縮緬鹿の子の兵兒帯を締めて居ると書いてある。是は甚だ冤罪で、連中も縮緬の兵兒帯を締める力はありません。所謂唐縮緬、メリンスの兵兒帯を締めて居つた、其位の程度であります。それで此根岸派の連中は能く酒を飲む、又御前ごつこと云ふのを能くやつたさうであります。それは抽籤で一人御前様を決めて、後は皆三太夫とか書生とかになる。それから又別に馬鹿名ごつこといふのをしたさうです。名前を各自、幸田露伴とか森田思軒とか呼ばずに、馬鹿名を付けた。落語などの馬鹿が付けてゐる名前を付けて呼びました。三太郎とか、與太郎とか、李兵衛とか、虚呂松とか云ふ名前をつけたさうであります。

或る時宮崎三味道人が、幸田露伴君に出會つて、びつくりして「いや、どうも幸田さん大きくなつたねエ」と云つて頭を撫でた事があるさうです。此時には幸田露伴氏は『都の花』の懸賞小説に當つた『露團々』或は『風流佛』等の名作を出して、其當時の大家であつた。此大家の背中を擦つて、頭を撫で「大きくなつたねエ」と言つたのですから、これは露伴氏も驚いたでせう。(笑聲)何でも幸田君は宮崎三味道人が師範學校の先生をしてゐた時代の生徒ださうであります。さう云ふ關係があつたと聞いて居りますが、或は當時のゴシップに過ぎないのかも、それは分りません。

根岸派の中で最も我々に親しみの多い人に幸堂得知と云ふ人がありました。此人は帝劇の出来ました當時、始終見物に来て居られましたから、山本さんなどは能く御存知でありませうが、洵にと

うも立派な方で、頭は光つて居りますが、白い鬚が此胸の邊まであつて、堂々として居る。能く、十徳などを着てゐて、上品な洵によいお爺さん、此人は所謂洒落本の研究家、今で言へば滑稽小説の畑の方で、黄表紙に非常に通じた人であります。非常な通人で、上野の三橋の下の方で、『忍川』と云ふ豆腐の料理をする料理屋を經營して居つたことがあります。其位ですから非常な食道樂で、江戸前の通であつたこととです。此人には有名な扇料理と云ふのがある。皆んなを集めて「今日は幕府時代のお留守居を並べて拵へた扇料理を御馳走しやう……」と云ふ、さア何が出るか一同首を長くして待つて居ると、鯛を買つて、扇を水に濡して此地紙を取つてしまふ、そして骨ばかりにして、この扇の骨で鯛の鱗をすつと引いたのを、それからどうするかと云ふと、此の扇の骨に一本々々鯛を口の方から刺して、さうして取れた地紙で以て刺した鯛を一つ／＼包んで是を焼いた。是は珍らしいと云ふので、一同食つた所が、どうも美味しくも何んともありません、後で聞いて見ると、鹽を附けるのを忘れたからだと云ふ話であります。(笑聲)兎に角斯う云ふ無邪氣な人でありました。

この幸堂得知と云ふ人は又、劇通で、芝居のことに就ては何でも知らないことはないと云ふので、先代の歌右衛門が何をした時は斯うだとか、先代の海老藏がどうだとか、何でも昔の型を知つて居るので、ある人が、どうも變だと色々調べて見ると、先代の歌右衛門とか先代の海老藏だとかゞ活躍して居つた時には、幸堂さんは生れて三つか四つの時分の筈で、それをちゃんと覚えてゐたのであるから餘程頭が良かった人でせう。(笑聲)此幸堂翁を中心にして當時の劇通仲間芝居をされました。尤も其前から劇通仲間は歌舞伎座などでやつたり、市村座などでやつて、大分珍談を残し



て居りますが、其時分、大森へ行つて大森劇場を開けました。鳥居清忠とか、永井鳳仙とか、右田寅彦とか、皆んなお歴々が揃つて行きました。無論幸堂先生も其一人で、其中で最も花形役者として人氣のあつたのが誰かといふと、伊坂梅雪氏だと云ひますから、他は押して知るべきであります。(笑聲)そこで色々狂言が出ました中で「菊畑」を是非やらう、幸ひ幸堂先生は鬚が其儘使へるから、鬼一の役を願はう。それは宜からうと云ふので、先生の所に持つて行つた所が「宜しい、では一つ、杖で打つ時に杖を振りかぶる先代芝翫の型よりも、前へついて見得を切る、堀越の型であるから……」と言ふわけで、大變な自信で、この様に能書が素晴らしいから、嘸結構であらうと、幕を明けて見ると、それがどうにも成りません。唯棒立ちになつた儘、目を白黒させて、科白が一つも出ないのでした。して見ると理論と實際と云ふものは伴はないものと見えます。(笑聲)

根岸派の糊卸しを大分致しましたから、今度は硯友社に就て申上げます。硯友社と申しましたも、今日では實際筆を執ります者は巖谷小波、繪の方で武内桂舟、それに私と、此三人位になつてしまひましたが、今日では硯友社なんと云ふものは、今の若い文士達の頭にはない。既に一昨年、東京會館で、水谷幻花と云ふ劇通の息子さんの婚禮がありました、山本さんも行つて居られたやうでしたが、私の隣席に並んで居られた若い方で、お嫁さんの親戚の方が、頻りに私に向つて話し掛けて「あなたは何であります、定めし頭山滿翁と御交際でございますね」と云ひますから「まア知らないことはありませんぬけれども……」すると其人は少し變な顔をして「でもあなたは、玄洋社の方ださうでございますが……」と言ふ。硯友社と玄洋社とをゴツチャにして居つたのであります。(笑聲)

硯友社の話を致しますと、どうしても御大の尾崎紅葉のお話になりますが、是は、實は、一昨年頃から、度々私は唖りも致しましたし、書きも致しましたので、大分紅葉の話は種切れになつて居りますが、併し此人は逸話に富んだ人で、眞面目な顔をしてゐて非常なユーモリストで、今迄生きてゐたならば、洵によい作物が出来てゐたらうと思ひますが、三十七歳にして、可なり早く此世を去りました。此人も矢張芝居をしたことがあります。此芝居の失敗談は、度々發表致しましたが、今日は取つて置きの話、餘り話さない話。尾崎紅葉が芝居しないで喝采を博したと云ふ珍談を申し上げたい。それはどうかと申しますと、紅葉の出世作でありました「二人比丘尼色懺悔」是が爲に、紅葉の文才が忽ち世の中に認められたのでありますが、扱て、當時日本橋の通油町に加賀吉と云ふ眼鏡屋がありまして、(此處の若主人が例の山岸荷葉)そこで毎年輪祭をやります。それに我々が招待されましたが、行くに就ては、向うでも毎年皆んな素人芝居をするから、それに負けないやうに此方でも、文士連で一暮やらうと、紅葉が先に立つて言ひ出しました。けれども「俺は忙しくて芝居はやれないから、君達が一つ硯友社を代表して僕の色懺悔を一幕出して呉れ」と、斯う紅葉から頼まれましたので、私と巖谷小波とが引受けました。それで「色懺悔」の主人公の、若い、色男の方の浦松小四郎と云ふのは、巖谷は男が好いからやれ。又その叔父さんに當る遠山左近之助と云ふお爺さん、それはお前は太分くすぶつて居るから、お爺さんが宜からうと云ふので、遠山左近之助の役を私が引受けました。(笑聲)

此稽古をやつたのが日本橋の堀留の、今は長唄の師匠として有名な芳村伊十郎、其時分は伊四郎と云ひました。で、伊四郎の家へ行つて稽古をする。其時分には伊四郎も餘り認められてゐないの

で、中々の御難の様子、座敷なんか、たつた一間しか有りません。今の榮藏さんと云ふ立派な息子さんは、生れて居なかつたやうで。そこで、第一腰を掛ける合引が有りません。何かないかと云ふと、踏臺が一つ見付かつたので、それを合引にする。立廻りをするには箒とハタキでやるといふ鹽梅で、ツケを打つ役目が紅葉で、これが又今日で云へば舞臺監督といふ處で、それでまア大騒ぎをして稽古をつけました。そこで是ならば負けないと云ふので、我々も太いに乗氣になつて、日本橋の加賀吉の所に乗込みました。是に就ては色々の滑稽談もありますが、略しまして、愈々大事な立廻りに迄漕ぎつけて、巖谷の浦松小四郎と、私の遠山左近之助とが、槍と刀とで渡り合つて、ひよつと顔を見合せて「いや、叔父上でござつたか」「おう小四郎か、こゝで討死するのは無駄な話、一先づ私の家へ来て隠れて居るが宜からう」と言つて連れて行く、それを一生懸命にやつて居りますが、見物がどうも一向見て呉れません。皆後ばかり向いて笑つて居ります。變だと思ひながら、花道の揚幕の方を見ますと、尾崎が揚幕の間から首を出して、どうも我々の方が心配でないものと思つて、我々の仕草通りに首を振つて居りますので、どうも皆くやつて呉れ、ば宜いかと心配しつゝ、つい釣込まれて、頻りに花道の出口で、首を振つて、紅葉その者が芝居をしてゐると云ふ譯で、此尾崎の首振り芝居の方が、ズツと見物にとつては意外な親物であつたと云ふことが分りました。是がまア芝居をしないで芝居で喝采を博したと云ふ尾崎紅葉の逸話の一つであります。(笑聲)

昨年の秋の末でございましたか、松屋の樓上で明治、大正、昭和の文士の遺墨遺物展覽會と云ふものが開かれました。大變盛會でありましたが、其時分に尾崎紅葉の物も無論出ました。然るに此

事を中村武維夫君が一月の『文藝春秋』に書いて居る。それを見ますと、種々遺物や遺墨があつた其中で、尾崎紅葉の羽織があつた。洵に趣味のあるものであると、まアどつちかと云へば紅葉を貶したやうな批評が載つて居りました。是はどうも私達に言はせると大變な間違ひである。其羽織と云ふのは雑紗で出来て居りました。襟はちやんと立つてありまして、一寸見ると陣羽織に似たやうであります。又横から見ると被布のやうで、後から見ると外套のやうである。陣羽織の如く被布の如く外套の如く、如く／＼で十五徳、當人が徳太郎だから二十徳であります。是は全然羽織ではない。當人は外套を拵へた積りである。其時代のことでありまして、今日のやうな二重外套の型が決つてゐませんでした。何か奇抜の物を拵へて、それを流行らしてやらうと云ふ尾崎の頭で拵へたのが、今言ふ陣羽織の如く外套の如く被布の如く、頗る變態なものであります。さうしますと待構へてゐたのが石橋思案、是は大變豪傑であります。是が又尾崎の外套を滅茶苦茶に罵倒する。是は罵倒する譯がある。其時分には文士で外套を着て居る連中は殆どない。所が石橋思案が着てゐました。是はどうかと云ひますと、お父さんの石橋政方さんの外套を譲り受けたのであります。是が古くなつて居りますので、頗る醜惡なもので、それを尾崎が見て、石橋の外套に對して「何だ是は、丸でヒボ、タミーの皮のやうで……」斯う言つて罵倒した後でありますから、敵を討つのは此時とばかりにやつたものであります。我々もそれに雷同しました。流石の尾崎紅葉も閉口して、三日か四日着ればかりで、後はそれを着ません。私はそれはもう其當時潰して、無くなつたものと思つて居りました所が、それが三十何年か後の今日になつて、尾崎家の箆笥の底から引出されて、松屋の展覽會に出た譯でして(其前に三越の時にも陳列されたのであります)當人が當

時既に嫌味を感じ、さうして三十何年間筆筒の底に藏つてあつた、それを今日嫌味の羽織であると云つて大發見でもしたやうに論ずると云ふことは、如何に若い人達が昔の事情に通じないで、故人に理解がないかと云ふことの一つの好い例だと思ふのであります。

此中村武羅夫君は、確か小栗風葉の弟子筋に當る人でありませうで、して見ると小栗風葉が尾崎紅葉の弟子でありますから、まア孫弟子見たいのものである。併し孫弟子であらうと何であらうと、情實に關らず、憚りなく言つて退けると云ふことは、誠に結構で、現代では、師弟關係などをやかましく云ふのは古いとしてゐる。大變な時代で御座いますが、さうすると、師弟關係に就て最も新らしい考を早くから持つてゐたのは、誰かと云ひますと、それは小栗風葉であつたので御座います。此小栗風葉と云ふ男は、洵に謂ふ所の新らしい考へを持つてゐた男で、何故かと云ひますと、紅葉が三十七歳で亡くなりまして、涙の未だ乾かぬ其初七日の晩に、グデン／＼に酔はらつて来て、さうしてドコかの勘定を尾崎家から支拂はしたと云ふこともあります。それなんか未だ／＼何でもない話でありまして、まだ其他種々新らしい行き方がありました。

紅葉の生きて居ります時に、何處かで酒を飲みまして小栗風葉歸つて來ません。餘り歸つて來ないので、先づ勘當と云ふことになりました。其時に小栗風葉が駈込んで行つたのが、畫家の武内桂舟の家、早速風葉が「どうぞお詫びを願ひます」と云ふと「それは詫びに行つてもいいが、全體どう云ふ譯でしくちつた」「ついでどうも雨が降つて居りましたので、其爲に歸りそびれました」「雨が降つて歸れなかつたのか、よし、それならば俺が詫びを入れてやるから、暫く待つて居れ」と云ふ。それから一日待つても二日待つてもお詫びに行つて呉れません。所が或る日非常な大雨の降る時

に、武内桂舟が、「是から詫びに行かう……」と云つて、それから紅葉の所に行つてお詫びをいたしました。雨の爲に流連をする、其詫びを雨の日に態々言ひに行くと云ふ極く皮肉な江戸ツ子のやり方は、まア今ちや餘り流行らないものらしいでございます。

さう云ふ小栗風葉、其小栗風葉の准門下の中村武羅夫、非常な人氣作者で、一方に菊池寛氏、是は文壇の大御所、それから中村武羅夫君のことを文壇の大久保彦左衛門と云ふさうです。彦左衛門と云ふから、三代に亘つた古強者で、餘程の年齢であらうと聞いて見ると、我々より二三代後の人に當るのであります。この彦左説も、何も當人が自分自ら云ひ出したものではありませんでせう。皆んなが祭り上げて、大御所だとか、彦左衛門だとか言ふのでありませうが、然し祭られて、それに納つて居る所は、洵に結構なことで、此頃の文士には非常に可愛いらしい雅氣滿々の所が有つて、洵に好いと思ひます。

元來昔の文士と云ふものは、一口に云へば馬鹿でございまして、經濟上の問題なんと云ふものは頭に持つて居りません。少しでも餘裕があれば、其餘裕で書生を置いて、それを育てる、即ち尾崎紅葉などが今申しました小栗風葉とか、或は泉鏡花、徳田秋聲、柳川春葉、其他多くの門弟を養成して居りましたやうなものでございます。

同じ雨に就て、同じ門下に斯う云ふ逸話があります。其頃谷活東と云ふ文士が居りました。是はどう云ふ關係でしたか、能く柳橋に行つて泊つて來ました。柳橋に其時分に新吉と云ふ義太夫藝妓がゐりましたので、そこで能く泊つたさうです。それで雨の降る日に、牛込の横寺町の尾崎の家へ歸つて來る。神樂坂の中途迄來ますと、上から尾崎紅葉が傘をさして下りて來る。是はしまつたと思

つたけれども、是はどうも横道に避ける譯に行きませぬ。(笑聲)一寸氣がついて見ると、柳橋で借りて来たのであるから、傘に大きく「柳ばし」と書いてある。それを見られたく有りません。萬策盡きた谷活東は紅葉に會うや、ペコ〜お辭儀をしながら、傘をくる〜ロクロの如く廻しました。(笑聲)併し是を見逃すやうな紅葉ではありません。家へ歸つてから早速呼付けて大ごと。傘を破つて焼捨てを命じました。そんな嚴格さでありましたが、それならば當人が柳暗花明の巷に立入らないか云ふと、決してさうではないのでして、兎に角餘りよい所へは行かれませぬけれども、神樂坂邊りで泳いで居りました。今ならばカツフェカバアでせうが、其時分にはそんなものはありません。所が尾崎と云ふ人は遊ぶのに一つの理想を持つて居ました。理想で戀愛を試みる。二人の女を對象として、米八、仇吉の板挟みか何かで、兩方でチャホヤされると云ふことを計畫するので、尾崎の思ふ通りに女の方はチツとも熱して來ない。それが爲に、ちれて非常に激したこともあります。

或時には吉熊と云ふ料理屋で、薙刀で劍舞をして、疊を破つたことを覚えて居ります。まだ色々ありますが、人を變へて申しますと、同じ硯友社の中で大橋乙羽と云ふ人がありました。是は早く亡くなりましたので、餘りに文名が知れませんでした。實に惜しい事をしましたもので、博文館の大橋家へ養子に行つて、大橋を名乗りました。前には渡部姓でした。洵によい人で、出版者と著作者との間に立つて、誠に氣受のよい人でありました。實に惜しいことをしました。曾て神田の萬世橋の萬代軒と云ふ古い西洋料理屋で文學會が開かれました。徳富蘇峰先生或は依田學海先生、それから先程申しました根岸派の人も盛んに出ますので、其文學會に出席すれば、一人前の文士にな

れたのだと云ふ權威のある會でありました。それへ我々若手連中が三四人出席することが出来ましたので、非常に光榮に感じて居りましたのですが、私の隣が大橋乙羽、種々御馳走が出て、其間に談笑が行はれる。最後の皿に紫色の綺麗な物が出た。何だか分らないが、大橋乙羽はいきなりそれへソースを掛けて了いました。是は何かと云ふと、苺のアイスクリームを平つたい皿に入れて出したものですが、勇敢にもそれへソースを掛けてしまつたのであります。まアさう云ふ程度でありました。(笑聲)

もう一つ乙羽君に就て面白いのは、或る席で、シルクハットに日本服は存外形がよいものだ、勿論紋付きの羽織袴でありますけれども、中々よいものだと云ふ話が出ました。(其時分に平氣でそれをやつてゐて實際何でもなかつたのです)さうすると乙羽君が「さうです。私もどうもあの位よいものはないと思ふ。私は實は持つてゐないので、親父(大橋佐平翁)のシルクハットを借りて行つたことがある。其時にどうも窮屈で中々着られなかつた……」と云ふ。シルクハットを着ると云ふのはどう云ふ譯かと、段々聞いて見ると、シルクハットではなくて燕尾服の事であつた。それが中々旨く着られなかつたと云ふ、誠にどうも罪のない一つの笑話でありました。

文士の壽命と云ふものは誠に果敢ないものでありまして、今の若い人達が天下を取つたやうな顔をして居りますが、是から十年或は二十年経つたならば、どれだけ壽命を持つて居りますか、其證據には明治文壇に活躍した連中は殆ど今日では忘れられてしまひました。現に尾崎紅葉などは、どつちかと云ふと多くの人に知られた方で、何と云ひますか、今日の言葉で言へば大衆作家でもありますので、比較的知られてゐなければなりませんのであります。それで、どうも今は知

らない人が多い。のみならず若い人になると『金色夜叉』まで分らぬさうです。讀めないさうです。今に『金色夜叉』の註釋を要するであらうと云ふ説があります。先年温泉場の熱海へ我々が行きました時に、矢張『金色夜叉』の話が出ました。つい口が迂つて『あれはまア今はモデルを使ふけれども、あの時代にはモデルと云ふものは殆どない、あつた所が、あちらこちらから寄せ集めて來てやるので、實際のモデルはなかつた』と斯う我々が話をした所が、あそここの古屋と云ふ有名な第一流の旅館の若主人が『さう云ふことをあなた方の口から御公表下されると、是迄折角熱海が金色夜叉で宣傳されたのが、さびれます、貫一が架空の人物だのお宮がゐない人間だなど云ふことはどうか仰しやらないやうに願ひたい』と云ふ、どうも貫一がゐなからうが、お宮がゐなからうが、尾崎紅葉があつたら、それで宜ささうなものであるが、それだけでは満足しない。あの小説のクライマックスとも云ふべき熱海ですらも、紅葉を記憶する事が非常に少なくなつた。けれども幸に二三年前から、紅葉祭と云ふものが催されて非常に盛大に行はれて居ります。昨年度招かれました私も参りましたが、此席で非常に驚きましたのは、土地の有志の方が多勢居られたが、私もまだ時間が早いから此中に交つて居りますと、其有志の一人が、紅葉祭に反感を持つて言ひますのには『熱海の土地と云ふものは成島柳北先生が第一に御紹介下され、もつと廻ると俳人の横井也有であり、又、明治に成つては坪内先生を初めとして、三浦親樹將軍とか、或は犬養毅さんとか、或は其他澤山の方が居るのに、それを捨て、尾崎さんだけを祭ると云ふのは怪しからぬ』と言つて居る。それはさうかも知れませんが、紅葉の金色夜叉が大衆的に近年熱海を紹介してゐる。その本當の値打を土地の人が知らないのですから仕方がない。既に紅葉をすら能く知らないのですから、前にゐる

江見水蔭なんか尙ほ知らない。それで私の眼前で紅葉を侮辱した言動を發したので御座いました。近頃私は能く地方へ行脚に出ますが、その土地の有志の方から『やア先生』なんて云はれますけれども、何、ちつとも私の何者だか知つて居られない。時たまには『どうもお懐しい、が、實はあなたは二三十年前亡くなられたものと思つてゐました』なんてやられます。(笑聲)今日は幸にして、それ程までに認められぬのでなく、皆様が多少でも私の様な者を御了解下さつて、御静聽を賜はつたといふ事を、誠に光榮と致しまして、私の講演を了ります。(拍手)

山本久三郎氏の紹介で出席。當日の會員は、大概若手の紳士方であらうと想像して、其ツモリで、自分の老年を聊か誇る様な口吻を漏らして降壇。然るに、聽衆の中には、鎌田榮吉、關直彦の二先生、其他老紳士が多かつたのが知れて、赤面した。

## 越佐と尾崎紅葉

(昭和七年二月二十三日午後七時三十分より——新潟放送局にて)

此間内は總選舉の爲に、大分御興奮の御方もお有りのよう。それで、今夕は、郷土に因んだ、趣味の話をなごやかに申し上げたいと存じます。

明治の文豪、尾崎紅葉。例の『金色夜叉』の著者であります。この文豪と新潟縣とは、ナカ／＼因縁が深う御座います。晩年にその、越後から佐渡へ渡つて、小木のローマンスを遺して、ますま

才有名で。併し、事實談は、既に私と致しましても、たび／＼發表して居りまするので、今夕は未だ申上げない他の材料を放送致します。

申すまでもなく尾崎紅葉は、生粹の江戸ツ子。では御座いますが、それが、越後や佐波に大層親しみをもちました。それは、偶然では無いので御座います。紅葉が『讀賣新聞』に入社して居りまして、其時の主筆であつた市島謙吉氏——春城先生と、特別に親しく御交際を願つてゐたり、増田義一さんとも机を並べてゐましたので、その市島先生や増田さんから、いろ／＼新潟情調を聴かされて、それで遊志が動いたのが動機かと存じます。それに最一ツは、その頃、新潟の、税務官で横尾平太といふお役人がありまして、この人の奥さんが、紅葉の實の叔母さんで、まア其關係も有つたので御座います。

紅葉は、明治三十六年に歿去りましたので、その時三十七歳。ところが新潟へ来たのは明治三十二年七月。三十三の血氣盛り、と云ひたいので有りますが、實は酷い神經衰弱。胃が勿論不良なので、當時『讀賣』の紙上で、大當りに當つてゐる『金色夜叉』。それがドウも思ふ様に書けませんので、平常旅行嫌ひ、別して汽車に乗るのが嫌ひの人が、思ひ切つて煙霞療養の目的で、東京を出発したので御座いました。

途中、赤倉温泉に寄り道をして居ります。この時分には、今の様に、スキーが流行しませんので。最も紅葉の行きましたのは、ですが、もしそれが冬であり然うしてスキーが有つたとしましたら、紅葉は喜んで其練習をしたらうと思ひます。然ういふ性格の人で御座いました。この赤倉は、大分當人の氣に入つた様で。

それから、紅葉は、鉢崎から柏崎に至る米山の磯を、大層譽めて居ります。實際此邊は結構で佐渡が見える日は別して宜しい。それに異存は無いのですが、紅葉はチト譽め過ぎてゐるよう。さて、長岡、三條、加茂、矢代田、この邊は恰度大洪水の後で、その被害の甚だしいのに、故人は驚いて居ります。

まア之までは順潮で。處が、沼垂で下車してから、尾崎紅葉スツカリ御冠りを曲げました。今の言葉で申しますと、第一印象が甚だ良好でなかつたので。

それは何かと申しますと、有名な萬代橋。その萬代橋で、橋錢を取られた。それが癪に觸つたので。人力車と共に一人前三錢五厘。その頃の貨幣價值から見ると、わづか三錢五厘とは云へません。その橋代を拂はなければ、新潟市へ入られないといふのですから、之は大概の旅人は感情を害します。今の様な鐵筋コンクリートの新しい橋を、一錢も拂はずに自動車で走らせる。之なら紅葉の第一印象は、頗る良好で有つたのでありませうが、木造で四百三十間、ガタ／＼するのを三錢五厘。ケンカラン。新潟市とも云はれるものが木戸錢に均しい物を取るの是不見識だ。新潟縣には金持が多いのだから、橋の建築費を寄附したら好かつたのだ。おれに金子が有つたら、ハンケチに包んで、橋の欄干に結び付けてやるといふ大氣焰。

まア併し、尾崎紅葉に、それだけの金子が有ツ子は無いので。や、併し、有つたとしたら、其位な事は、必らず實行するほどの、氣概は持つて居りました。

その代り、町並が碁盤目に整列してゐるのや、道路が綺麗で、柳や、橋や、逆も東京は及ばないと、此所まで來ると、もう御機嫌です。

紅葉の叔父に當る横尾家は、醫學校町で、此所を根據地として、新潟見物。鍋茶屋とか、行成亭とか、その邊にも無論遊んで居ります。けれども、その當時、文士としては第一流の尾崎紅葉も、ふところは決して豊かでは無かつたのですから、大して全盛な遊びはしなかつたのでせう。恐らく二軒とも、招待されて行つたので有りませう。此二軒に就て餘り委しく申しますると、頼まれもしない宣傳に成りますから、止しますが、併し、これは歴史的事實ですから、一ツ鍋茶屋の逸話を訴らして頂きます。新潟名物、お袈裟節、盆踊、例の樽を叩くのが大層氣に入つたと見えて、俳句をその樽の胴腹に書きました。それは。

新潟や愁を知らぬ樽礎

あのトントコ／＼と樽を叩くのを、礎の音になぞらへて、樽礎。紅葉此時の造語ですから、此句以前に樽礎とは呼ばなかつたので御座います。

この句が、われ／＼文士仲間の評判に成つて、『尾崎は巧い見立をした。樽礎とは面白い』段々傳はつて、東京の文學ファンに、樽礎と云へば『ア！新潟のアレかい』といふほどに成りましたので。

その後、大橋乙羽、元は硯友社の一文士で有りましたが、博文館の養子となり、同時に支配人と成りました人、これが新潟へ来て、大層歓迎されて、鍋茶屋へ招待された時に。

『早速だが、近頃評判の、樽礎を見せて貰ひたい』と申込みました。

すると、鍋茶屋の方では『へえ、樽礎なんて、そんな物は存じません』といふ譯。

『いや、尾崎紅葉といふ、東京の大文豪が来て、樽に書いた筈だ』

『へえ、どなただか知りませんが、樽に悪戯書きをされましたので、そのよこれた樽は止めにして今では他のを用ひて居ります』といふ。

これは併し、單に鍋茶屋のみではなく、地方の人々は、今ほど文士を高く買ひません。尾崎紅葉が何んだか知らない者が多かつたので。

此一件は、私が大橋乙羽から、直接聞いた實話で、未だ故人も存命中で、乙羽が私の耳にさ、やいて『尾崎君も、東京ではモテるけれど、新潟ではね』といふ譯で。

それから、まア、ズツと後に、恐らく紅葉が死んでからで有りませう。漸く故人の眞價もわかつて、物置から探し出して、竹のタガを脱して、木をバラ／＼にして、額面にして懸けられてゐたさうで有りますが、恐らく先年の火災で焼けた事と存じます。惜しい事で、斯ういふ前例が有りますから、まア文士が遊びに来たら、歓迎しておくものだと思ひます。

扱て話頭を、佐渡に轉じまする前に、日和山に就て申上げます。無論、紅葉も登つて居ります。新潟へ行つた者は、必らず日和山に登つて見る。その日和山から佐渡を見ると、どうしても佐渡へ行かずにはゐられない氣が起る——といふ。これは、自然美の誘惑とでも申しますか。兎に角、佐渡といふ國は、人を引付ける様に出来てゐます。

佐渡へ／＼と草木も靡く。

此齋たれ唄まで引いて、紅葉は佐渡を禮讚してゐます。これが赤倉から佐渡を遠望した時からですから、日和山の船見櫓へ登つて佐渡を見たのでは、いよ／＼遊志勃々で。

佐渡へ渡つたのは七月八日。朝が早いので、礪町の宿屋に泊りました。佐渡へ歸るといふ齋藤と

いふ人。それから羽田清次君。この人は今も健在です。この二人の案内でした。處が、この泊つた宿屋には、縣下の警察官會議で集まつた警官が、十數名、泊り合せてゐて、大聲で論じるのが、一時を過ぎては已まなかつた。警官が安眠妨害をしたといふので、紅葉ヒドク憤慨して居ります。處が、この警官の論じ合つたのが、何かといふと、内地雜居の後に於ける警察事務に就て、といふのださうですから、今日からでは實に隔世の感で。

扱て、乗出した船は、わづかに五十噸の度津丸、おまけに近年珍らしい暴風で、テンテレックの大御難で、おまけに、先生、この時お尻に根太が生じてゐて、それで、どうも、唯さへ坐りがわるいのに、狂瀾怒濤に翻へされるので、起上り小法師の如く、轉がつては起き、又轉がつては起きたといふ。

傳へ聞く、日蓮上人は、浪の上に六字の題目を書いて、佐渡の海の難をまぬかれたといふ。紅葉山人、得意の俳句、十七文字も、此時には出し得ません。但し根太からウミが出たと、自分の日記には書いて御座います。チト汚ない。

この度津丸の航海で、最一ツ紅葉を悩ましたものが有りました。それは十六聯隊の兵士が乗つてゐて、この兵隊サンが、若い細君を同伴してゐて、その難航海の間に、いとも優しく新妻を介抱した。それを見せつけられたといふ。明治の大文豪も少々ヤケたものと見えます。難航海の苦しみに、根太の痛さに、若夫婦の睦まじさに悉く、中毒。おまけに兩津へ着いても、今の様に棧橋は無し。艇で又一ト苦勞をして、其上にです、命から／＼上陸して見ると、宿屋が満員。本間旅館には岩崎男爵の一行が泊つてゐる。他の宿屋には徴兵検査で壯丁が一パイ。

まア佐渡の第一印象も餘り良くなかつたので。といふのも、今日ほど文士の位地が認められてゐませんので。此點に於て、故人紅葉には、氣の毒で御座いました。

その一例として、羽茂本郷の小學校の先生を訪ねた話があります。これは佐渡に入つてズツと後話ですが、都合上、繰り上げて申しますが、紅葉も佐渡へ来た處で、一向話相手が有りませんので、小學校の先生なら、少しはわかるだらうと、それで訪問致しました。處が、その先生といふのは、濱田弘次郎と申しまして、此人の方では、一向どうも紅葉を知りません。けれどもまア、文士といふのだから、何か書くのだらうといふ程度で、記念の爲に、有合せの扇子を出して、揮毫を依頼しました。

はさ／＼と刈られをはんぬ 花薄

この扇面は、今は新發田の、清水中四郎氏の秘藏と成つて居ります。

扱て話を元に戻しまして、兩津から、各名所古跡を見物して、相川へ行きました。恰度、鑛山祭の最中。この相川では、高田屋に泊りましたが、座敷を變へる時に、宿の娘さんが、粗相をして、紅葉が大事にしてゐた、旅硯を落して割りました。紅葉といふ人は、書が得意で、若も筆、墨、硯、用紙など、ナカ／＼吟味して、やかましいので、旅にまで硯を持つて出てゐたので御座います。以てその凝り性がわかります。旅先で愛硯を割られたのですから、嘸怒つたらうと思ひましたが、相手が何分、娘さんだつたので、別にイヤな顔も見せなかつた。この話は先年高田屋の老人から直接私は聴きました。

これが反對だと問題で、娘サンが紅葉の硯を割つたからよいので、紅葉が娘サンの硯を割つては



大變でした。

併し、大分此邊から佐渡でも認められて來まして、新町では、山本半藏氏其他に歓迎されまして野呂間人形を見て、俳句を口吟して居ります。それを記念すべく、昨年句碑として建立されましたさうで。又、新穂では通り過ぎて兩津まで行つたのを、ワザ／＼呼戻して、中川牧之翁其他が優待してゐます。この時に、根本寺見物の途中、買物をする目的で、或る塗物屋に入りました。案内役の高野柳翠氏が見てゐると、紅葉の目は、右の品物よりも、店番のおかみさんの、腰の邊に注いで居ります。別に偉大なるお尻といふわけではなし、先生、おかみさんの腰ばかり見てゐる。どうも變だと思ひましたら、それは佐渡女の、特に着用してゐる、前垂掛け。名を何んと云ひますか、腰法衣の様にも見える前掛けを見て、珍らしがつて、いづれ小説の中に書き加へようと思つたので御座いませう。すべて斯ういふ處に、細かに目をつける人で御座いました。

新穂へまゐる前に、例の小木へ沈没してゐたので御座います。小木では非常に歓迎されましたので、最も小木では、紅葉に限らず、誰でも歓迎される、とか承はつて居りますが、この小木で先生スツカリ好い心持に成つたので御座います。

小木の權座屋の小糸。お糸さんとのローマンズは、餘りに有名で有りますから、今回は申上げません。それに紅葉は死にましたが、相手方は未だ健康ですから、敬意を表して、申さない次第で有りますが、この權座屋の小糸といふ人は、餘り美人ではなかつたので。や、今日健在なるお糸さんは、美しいお婆さんでゐられるでせうが、權座屋の小糸は美人ではなかつたといふ輿論——輿論も可笑しいが、ま、そんな譯で。

然るに、尾崎紅葉の目には、たしかに美しく見えたものと思はれます。それに就て私は、一大發見を致して居ります。紅葉の見る美人と、普通一般人の見る美人とは、標準が違ふ。世間で美しいといふのを、紅葉は却つて、わるく云つてゐます。彼の有名なる紀行文『煙霞旅養』に、新潟の七不思議と、五案外といふのを掲げて居ります。不思議が七ツ、案外な事が五ツ、と數えて居ります。その七ツの不思議も、五ツの案外も、大體新潟の悪口で御座いますが、その五ツの案外の中に、『美人を見ざりし事』といふのが有ります。美人國の首府ともいふべき新潟へ來て、美人を見なかつたのは、案外であるといふので有りますが、これは併し、何も紅葉が、新潟でアマリ歓迎されなかつた、その爲に、反感を抱いて、皮肉を云つたとは思はれません。そんなイヤしい心を持つてゐる紅葉では御座いせんので、眞から新潟には、美人無しと信じたので、猶悪いかも知れません。

これはで御座います。要するに、美人に對する標準と云ひませうか、定儀と申しませうか、つまり當人の嗜好が、一般人と違つてゐたので。一方に於て、十人が十人、或は萬人が萬人、餘り美人ではないと評する處の、小木の婦人。それが紅葉の目には、美人と見える。それを標準として、他の婦人を見れば、それは美人に見えないのは分り切つた結論で御座います。ですから、紅葉が新潟に美人無しと云つたのは、之を一般の——世間一列の目に直して見ますと、取りも直さず全市の婦人悉く美人であるといふ事に、裏書きされるので有りますから、別にお氣にお掛けに成らない方が、宜しいかと存じます。

以上の如き次第で、尾崎紅葉は、越佐の旅から歸つて、生れ變つた様に成つたので、見地を廣く

して、文想を貯へ、これから新方面に筆を執らうとしたので有りますが、悲しいかな、健康が次第に不良の爲、前から書きかけの『金色夜叉』すらも、完結に至らず。ま、怨を吞んで——思を遺して、彼の世へと参りました。

もし、健康が恢復して、天彼に壽をモット／＼貸しましたなら、必らずや、越後や佐渡を背景にして、新方面に大傑作を出したので有りませうが、それを見ずに終りました事は、お互ひに遺憾の極みで御座います。

終りに臨みまして、元來、越後なり、佐渡なり、昔から、文墨の士を歓迎する土地で、その方面に興味の有る方が多いので御座いますといふのは事實で有ります。が、紅葉が参りました頃には所謂、文人墨客の漫遊家、書を書くとか、詩を作るとか、然ういふ風の文人に重きを置いて、小説家には餘り同情しなかつた。と云つて、それなら、全然紅葉が、新潟縣下では顧みられなかつたかといふと、然うでは有りません。が、現代人が、今の流行文士に對する程、熱狂しなかつたといふその差に過ぎないと存じます。

今日では、全縣下、どちらへ参りましたが、文學の趣味に富まれ、文士に對しても、多大の好意を表されます。私如き、時代おくれの老朽作家にすらも、到る處御同情を賜はります、有難い次第で。

地下にある尾崎紅葉は、これを見て喜び且つ羨んでゐてくれる事と存じます。もうその紅葉と生別れてから約三十年。けれども、私は、新潟へ来て、今日、放送局を訪問しまして、佐渡ヶ島を望みました時に、紅葉は、アソコに、未だ生きてゐるのではないかといふ様に思はれて、涙ぐまれたの

でありました。私は元來泣虫です。や、つい、自分の事にまで及びまして、恐縮。それでは、これで『越佐と尾崎紅葉』の趣味講演を終りと致します。

此放送を聴かれた山田穀城氏の説に従ふと、紅葉が鍋茶屋の即吟は——新潟や愁を知らぬ樽きぬた——ではなく——短夜の夢ならさめな礎樽——で、それも樽に樂書はしなかつたと、鍋茶屋に同席當時の記憶を『新潟新聞』で發表して、更に礎は冬季だから、夏の席では可笑しいとまで難ぜられた。之は誤解で、紅葉自から記した『煙霞療養』の鍋茶屋の條には、明かに——新潟や——で——短夜——の句は出てゐない。樽に樂書したのは當時有名な話。礎を雜に取つても好いと附記してある。(委しくは『十縣飛々行脚』の『ぼつ／＼』中にあり)

## 佐渡と明治文豪

(昭和七年六月二日午後六時三十分より——新潟放送局にて)

佐渡の國へは、昔から、名士が大分漫遊に出かけて居ります。吉田松陰先生なども其一人。茲に一ツ惜しい事には、元祿の頃、一代の俳聖、芭蕉翁が、素通りをされて、唯一——荒海や佐渡に横ふ天の川——アノ有名な一句を遺されたゞだけで、『奥の細道』の中に、佐渡が出てゐないといふ事はこの國の爲にも惜しまれるし、芭蕉翁一代の風雅に對しても、惜しいので御座います。是非、眞野の御陵の前に、アノ謹嚴な芭蕉翁を端座さして、一句有らしめなければ成らないので。これなきは

千載の恨事で御座います。

それから寛政の頃に『東遊記』の著者、橋南谿。この人が、直江津から船を出して、佐渡行きに失敗して、恐ろしく荒海気分を發表しました。事實でも有りましたらうが、餘りに名文過ぎて、連も人間の行く處ではない様に書いて了ひました。これが、どの位、佐渡に禍ひしたか知れませんが、この南谿の記行文と、佐渡は四十九里のアノ狸譚とは、確かに佐渡を誤解させた、悪宣傳で。

今日では、モウ佐渡は陸つゞきも同然。新潟から兩津へとしても、寺泊から赤泊へとしても、本統にワケなく行通が出来るので御座いますが、その爲に、今日では、澤山の觀光客が押掛けます。が、明治時代の文士は、と申しますと、餘り入り込んで居りません。

佐渡といふと直ぐ尾崎紅葉。佐渡と紅葉とは、腐れ縁とでも申しませうか。併し、どうも、紅葉の話を持出さないと、ピツタリ来ない様で。私は既に東京の放送局から二度、この新潟局からも、此春一度、放送させて頂きましたので、今夕は他の明治文豪と佐渡の話。それを主に致しまして、最後に又紅葉の小木情話。それをチョツピリ申上げ様と存じます。

それで、佐渡に入つた明治文豪を数えますと、最初に幸田露伴君。今の文學博士幸田成行氏。此後は、時間上、すべて敬稱を省略させて頂きますが。その幸田露伴、それから尾崎紅葉、ついで遅塚麗水、巖谷小波、佐々醒雪、大町桂月、といふ順序かと思ひます。その他に有つたかも知れませんが、私、寡聞にして、それだけしか存じません。

明治時代では、紅葉と云へば露伴。幸田と呼ばば尾崎。所謂紅葉、兩大家の盛名は隆々たるもので、その露伴の若盛りには、佐渡に渡りました。それは明治二十五年の夏で。此時には、奥羽から越

後、佐渡、それから越中、越前、丹後といふ風に、行通不便の時代としては、ナカ／＼の大旅行で、その紀行文が有名な『易心後語』却つて此紀行文よりも、『佐渡ヶ島』といふ小説の方に、細かい記述が御座います。最も、小説とは云つても、最後の方に、申譯的に少しばかり人事が取入れて有るだけで、前半の方は自然を主としたもので。恐らく、有の儘、著者自身の感想を書かれたものらしい御座います。鑛山の内部などは、實に微細な點まで記録してあります。之に従ひますと、佐渡の人達は、當時の流行作家たる幸田露伴が来たのを知らずにゐて、素通りさして了つたらしいので。勿論、露伴の性格からしても、人に知られたくなく、何處までも微行であつたのでありませう。その小説『佐渡ヶ島』の中に、小説の主人公、即ち幸田露伴が、相川の宿に泊つた時に、宿の主人が露伴の身柄を疑つた様に書いてあります。其文章には。——用も無き男の、わざ／＼の鳥渡りと聞いて、ちと合點しかねたる亭主の顔つき。しげ／＼と我が面を覗くをかしさ——云々。然う書いて御座います。

そこで、露伴は、自分が文士であるといふ事を、眞面目に言譯するのも面倒臭いから、單に鑛山見物に來たと答へた云々。これが本統だと思ひます。

明治二十五年頃には、佐渡に限りません、全國的に、文士の眞價を認めて居りませんから、此時に佐渡の人々が、露伴先生を素通りさせたといふ事は、これは已むを得なかつた事と思ひます。

その後、明治三十二年に至つて、紅葉が入つた時にも、最初は、あまり歓迎してゐません。この事は度々申しましたから、略しますが、其後へ遅塚麗水が行つて居ります。

麗水と云へば、紀行文文學の一生面を開いて、能く歩き且つ能く書いて居ります。今も猶露伴同

様健在で。どちらも六十六歳の筈で。尾崎紅葉が生きてゐれば、矢張六十六歳。この運塚麗水は、東京の新聞記者といふ肩書も有りまして、少しは佐渡で歓迎された様ですが、今の人が、文士に對して、理解と同情とが深い様には、迎も行かなかつたらしい。

併し、小木では大層歓迎されたといふ事だ。それは、誰が一體歓迎したのかわかりません。男が歓迎したのか、女が優待したのか、それも分りません。何んでも先生、小木から、汽船で、直江津の方へ歸るつもりで有つたのださうですが、此時海上浪穩かならずで。航海が止つたので、已むを得ず小木で船待をしてゐた。其船待の間に大歓迎をされたので、間もなく海上は至極浪穩かに成つて、船は毎日出るように成つたので有りますが、麗水先生だけは、ナカ／＼出なかつたといふ、これは併し、當時のゴシップに過ぎないと存じます。私は親友麗水の爲に、辯解するので御座います。

此時に麗水が、不圖した事から、非常な珍品を手に入れました。それは最近に、尾崎紅葉が、小木で以て、特別に愛顧にしたといふ文學藝妓、權座屋の小糸、おかん屋の小糸とも云ひましたが、その寫真で。

これを土産にして東京へ歸つて、麗水の親友でもあり紅葉の亦無二の親友でもある石橋思案に示しました。

「オイ、石橋。尾崎が、佐渡で、行方不明に成つたといふ大評判。その行方不明の間に、紅葉が特別に愛顧にしたといふ文學藝妓があつた。それは、これだよ」といふので出しました。

石橋思案は大層喜びました。紅葉は佐渡から歸つて来て、小木には大層美人がゐるといふてゐた

が、此寫真では、チツとも美人ではない。や、實物は美人かも知れないが、この寫真では美しくない。好し、今度紅葉が來たら、此寫真を見せて驚かしてやらうと、待構へてゐましたが、遂に突き付け得なかつた。何故かといふと、どうも、紅葉のブライトを傷けるやうで。オイ之かい、と手輕に寫真を投出すのに忍びなかつたといふ。

まさか、そんなに醜婦ではなかつたのでせうが、評判ほど美人でなかつたのは事實らしいので、それで以て一代の文豪尾崎紅葉を、手玉に取つて、投げて、拾つて、團子に丸めて焼いて食つたといふのですから、餘程凄腕で。又一通りならぬ親切を盡したのだと思はれます。この二人に就て紅葉自から記した日記文が、二三年前に發見されました。

それを發表するのが今夕の放送の山。が、それは一寸お待ちを願ひたい。その前に、未だ他の文豪の話が御座います。大正六年に巖谷小波が來てゐます。それから小波は度々渡つてゐますから、皆様も能く御存じ。その最初の時に、小木で圖らず、文學博士の、佐々醒雪に、奇遇の一幕を演じて居ります。(澤根と訂正す)

醒雪は直江津に來てゐましたが、あちらから佐渡を望んで、遊志勃々、つひ浴衣がけのまゝ遣つて來た。羽織も袴も荷物は勿論、直江津に置き放しであるといふ。それほど佐渡といふ島は、人を引付ける力の有る島で。露伴も島を見てから急に行きたく成つたといふ。紅葉も其通り、誰でも然うらしいので御座います。佐渡を、夢の國、繪の國、詩の國と云ひますが、私は、魅力の國、人を引付ける國と云つて好いと思ひます。金の出る土地は又格別で。

大町桂月は、大正十三年七月。この桂月は、文豪でもあり、又酒豪でもあり、實に飄逸な人物で。

生地その儘が既に奇人であり、一舉一動、一言一句、奇ならざるは無し。と云つて、強て奇嬌を眩ふのではなく、天真爛漫、まア明治大正に珍らしい人で、従つて佐渡には、逸話を澤山遺して居ります。が、惜しいかな、其紀行文を遺して居りません。書かないでなくなりました。ですが、當時の、案内役。新穂の羽田清次翁が健在で、同氏から聴きました實見實聞に基きますと、桂月は餘り他の旅行家の廻りませぬ、内海府から外海府を、悉く廻つて居ります。それから佐渡の三山を跋渉して居ります。相川では壽志嘉で歓迎されてゐますが、小木では紅葉の様な材料を遺して居りません。相川では壽志嘉の老爺と意氣投合したようで、奇人同士ですから、蓋し、好取組。

羽茂では風間公三樓氏等の主催で、天神様の能舞臺で、歓迎會が催されました。「私もいろ／＼の場所酒を呑んだが、能舞臺では始めてだ」と、大層喜んでと申します。然うして俳句を作りました。それは。

鶯や十戸の村の能舞臺

といふので有りました。ところが、羽茂の人は納まりません。風間公三樓氏が「先生、羽茂は十戸の村では有りません、立派な町ですよ」と注意しました。桂月例の調子で、「ま、ま、十戸の村にしておかう。それでないと、句が面白くない」と云つたと云ひます。

まアそんな具合で、桂月は、曾て今までの文士が味はぬ大歓迎を到る處で受けて居りまするか、どうも當人は、本格的、鹿爪らしい歓迎ぶりは、恐縮したと見えまして、西三川からの歸途、土地の村長其他の有力家が、大勢附いて來られたのを、有難迷惑に感じて、遮二無二途中で歸つて貰つて、羽田氏等の内輪の人だけで、小律の運上野の茶店へ入つて、そこで簡単に酒を呑んで「佐渡で

一番ウマイ酒を呑んだ」と喜んでといふ。つまり窮屈なのが嫌ひだつたので。

桂月が金北山へ登山した時の話が、一番振つて居ります。此時は、新穂の池野準二氏や金澤の近藤福雄氏、其他六七人が同行。大きな酒樽まで擔ぎ上げたといふのですから、大名行列。その又酒樽を忽ち、空にしたといふ。

金北山の頂上で泊る事に成つて、暑いので、御堂の外へ皆轉がつて寝てゐました。すると、夜半に至つて、何者やら、忍び足で襲來しました。何んだか桂月の足に觸るものが有りますので、さすがの文豪桂月もビツクリして飛起きました。これはテツキリ野猪だと思つたので。

處が、これは新潟縣の、林務課長の一行で、この人達も矢張、金北連山の森林を視察に來たのでしたが、道に迷つて、酷く難儀をして、食料は切れるし、ヒヨロ／＼して、山頂の御堂まで辿りついて、手探りで寝所を求めようとすると、何んだか毛ムクジャラの一部に觸れたので、之は亦テツキリ野猪だと思つて、吃驚した。向ふもビツクリ。此方もビツクリ——野猪にはあらで旅の人——そんな芝居氣はどちらにも有りません。之はどちらも驚くのが尤もで、で、まア、事情がわかつて、桂月の方の食料を分けて上げたので、大變それを喜んで、此御禮として、新潟で大歓迎が開かれたといふ。

此他未だ面白い話が澤山有りますが、今夕は、僅かに二十五分しか、時間を頂いて居りませんか、桂月の方は之位にして、いよ／＼御約束の尾崎紅葉、小木情話。(追訂、二十五分は局の方の誤算で、放送中途、五分追加せよと紙片にて急告された)

既に此春も少々素ツ葉拔きましたので、或人から、イクラ御親友の間でも、故人の秘密を云々す

るのは、如何なもので有りませうと、忠告が出ましたけれど、これは既に歴史的事實として、知れ渡つた話でも有りまするし。文學研究家としては、紅葉程の文豪の、人間味の有る點を、有のまゝに、知りたいといふ、御希望も有るだらうと思ひまして。それに此頃では、佐渡に於ける紅葉の研究家も、大分お有りのやうで御座いますから、他人の手に掛けるよりも、私が引導を渡した方が、佛も浮ぶだらうと存じまして。

そこで紅葉が小木に滞在中、本陣と致しましたのが、旭町の權座屋。此所で特別に愛顧にした權座屋の小糸。この問題が餘りに評判に成つたので、小木の有志がカラカヒ半分、一日紅葉の歡迎會を開いて、小木の藝妓は大概それへ呼び集めました。然うして置いて、唯ツた一人、小糸だけを呼びませんでした。然うしてナカ／＼紅葉を返しません。小糸はヤイ／＼迎への手紙をやりましたが――今にわかる事だ、わしは必らずお前の處へ歸る――然ういふ意味の返事を書いたと云ひます。無論人目を忍んで有りませう。お安くないわけ。結局は權座屋へ歸つたわけで御座います。小木のいたづら仲間は、そんな事では承知しません。日を代へて、これは書間ですが、濱の町の常磐屋といふ内の、三階で、その頃小木第一の美人といふ、お竹といふ藝妓を紅葉に見せました。このお竹といふのは、其當時小木に二人有つて、一人は大野屋のお竹、一人は猪波屋のお竹。大野屋のお竹といふのは、ロクロ首といふ評判で、マサカ夜中に首が抜けて、行燈の油を背めたのでありますまいが、首が長かつたのは事實らしい。一方の猪波屋のお竹、これは實に美人で有つたうちですが、それよりも矢張、美人成らざる權座屋の小糸の方を、紅葉は愛顧にしました。要するに、其行届いた親切を、喜んだのと見えまする。

最近に私は、紅葉が佐渡で書いた日記の一部を見ましたが、それには斯ういふ意味の事が書いて有りました。それは名文ですが、其控へを一寸見失ひましたので、意味だけを申し上げます。

月明の夜に――月のいゝ晩に、お糸を連れて、海岸を散歩して、砂の上に引揚げてある漁船の船べりに、二人並んで腰を掛けて、巻煙草を吸つた。すると忽ち氣が爽かに成つて、こんなうまい煙草を吸つた事は、未だ曾てないといふ。然ういふ意味で御座いました。

桂月は、運上野の茶店で、茶碗酒を呑んで、こんなウマイ酒はないと云ひ。紅葉は小木の海岸で、こんなウマイ煙草はないと云つてゐます。

一人は酒、一人は煙草。二人の嗜好から、二人の人物が、明かに出てゐるので、どちらにも親友である私としては、實に此二人の異なつた逸話に、興味を深く覺えると同時に、感慨無量なので御座います。

未だ此他に、紅葉には、小比叡でお糸とのわかれの名文章が有ります。

それは先年『木大刀』といふ俳句雜誌に乗つてゐますので、略しますが、如何にも後に心を引かれながら行く。村山の三階といふ茶店から、二三町。大きな松の木が一本有る、その坂の有る處まで見送られたといふ、簡潔な美文が遺つて居ります。

そこに、その坂のあたりに、未だ紅葉の魂は遺つてゐるのではないかと思はれます。私は、明日から九年ぶりで、二度目の佐渡行脚を致しますので、是非此所を尋ねて見たいと思つてゐます。然うして紅葉の魂にも逢ひませう。又運上野で桂月の魂にも逢ひませう。私の佐渡入は、老行脚、唯一人ですが、幻影的には三人旅と成るのではないかと思ひます。それを楽しみに致して居ります

る。それでは此邊で、『佐渡と明治文豪』の話、御わかれと致します。

桂月の金北山登りに就て、同行者の近藤氏から詳報を得た。多少相違が有るが、其儘にして置く。醒雪の渡船に就ても、直江津からではなかつたと、當時同伴の伊藤純逸氏から聞いた。

## 紅葉と佐渡

(昭和七年七月七日午後六時二十五分より——東京中央放送局にて)

明治文壇の巨擘、尾崎紅葉。『金色夜叉』を書いてゐる間に、健康を害しまして、越後から佐渡へと煙霞療養。初めて、佐渡の土を踏み歩いたのが、今から三十三年の昔。明治三十二年七月八日、御座います。

紅葉と佐渡とに就きましたは、度々私は放送させて頂きました。七年前の、私の處女放送がこの題目。最近には新潟放送局でも一席辯じましたので、然らう／＼は御迷惑と、恐縮には存じますが、實は、私、先月二度目の佐渡行脚を致しまして、紅葉山人の隠れたる逸話を、大分探して参りました。で、明治文學研究の盛んな今日、この大文豪の、人間味に就て、少しく語らして頂きたいと存じます。其の代り、之を以て打切として、もう遣りません。ま、一世一代の放送で。

この前、即ち七年前に放送しました時に、どうもお前は、故人の私事を素ツ葉抜き過ぎると一部の人からお小言を頂きましたが、小木に於けるローマンスは、もう一つの歴史であり、又詩でもあ

り、劇でもある。世間周知の問題ですから、正しく事實を發表した方が、却つて友情かと存じました。それには今度其相手方から、三十三年間包み隠して置いたといふ、秘中の秘話を聴いて参りましたので、それから先づ報告……すれば宜しいのですが、そればかりお聴きに成つて、後はスピンツをお切りに成ると、私としては、甚だ残念ですから、これを最後に廻すといふ、極めて幼稚な戦法を用ゐさせて頂きたい。

そこで今回は、紅葉が旅行した順序を、逆に、所謂倒叙式に、歸り路の、新穂の逸話から申し上げます。コノ新穂まで戻つて来た時は、紅葉は遊びくたびれて、早く東京へ歸りたく成つてゐたと見えまして、有志の懇望を避けて、ソツと素通り。兩津まで人力車で乗越して了ひました。

電話も、今日ほど普及してゐません。自動車なんて無かつた時代ですから、連絡が巧く取れませんで、郵便で、どうか新穂の高喜といふ料理店へお立寄りを願ひたい。そこでお待ち受けしてゐますといふ譯で。俳人仲間や文學青年が、高喜の店で、毎日眼張つて居りました。が、紅葉は、浴衣がけに絹紬の兵子帯、頗る無雑作な扮装なので、見逃して了ひました。もつとも、紅葉の方の口實では、高喜といふのを、高茂といふ宿屋と間違へて、そこで中食を致しました。ところが此高茂には誰も出迎へてゐなかつた。それで兩津まで走らしたといふのですが、事實は然うでは有りませぬ。新町から此所まで送つて来た、矢ヶ崎宜親といふ人に『僕が兩津へ着いた頃を見計らつて、新穂の人達へ知らしてくれ』口留に二十錢玉を一ツ握らしたさうです。安い買収で。然るに矢ヶ崎ド、少し早目に知らしましたので、それ、追ひ掛けるツてんで、中川收之といふ老俳人の息子の、治作といふのが、綱ツ引で二里半。イヤオウ無しに引戻したといふ、熱誠な歡迎ぶり。宴會やら、

俳席やら、講演會やら。

處が、どうも、非常にくたびれてゐると見えまして、高喜の三階で、雨戸を締切りにさして、午頃までは、朝寝を致しました。勿論朝寝は一ツの癖で。この高喜の三階は、今も其の儘ですが、家業が變つてゐるので、三階の雨戸はズツと締切です。昭和七年の今日、未だ紅葉が寝てゐる様な氣がして、なつかしく存じました。

高喜の主人は、矢張俳人で雅號を翠齋。既に亡くなりました。その子の高野柳翠、健在で。此所に、二日ばかり逗留。その間に日蓮上人の聖跡として名高い根本寺へ參詣して、南無妙法蓮華經の法の字を、書き違へてゐるのを發見して、住職に嚴談するツモりで、面會を求めた處が、生憎不在。それで小僧を捕へて恟々と書法を説いたといふ。小僧はベツを搔いたと云ひますが、それは然うでせう。どうも此の紅葉は、一寸した事でも氣に成る。間違つたのがイヤなので。例の凝り性の現はれで御座いませう。

この凝り性を最う一ツ申上げますと、何某の爲に墓を建てるに就て、その戒名を碑面に書いて頂きたいと、高野柳翠氏が依頼した處が、さア大變。揮毫が未だ出来ない前から、墓石の選擇で。墓地へ飛込んだり、往來の石塔をしらべたり、後には石橋を叩いて見たり。その又石に就て一々講釋が大變で。結局「いづれ、良い石を探しましてから」「好し、石が有つたら書いてやる」とその儘に成りました。あの時お氣に入りの石が有つたらと、大層惜しがつて居ります。

この新穂へ来る前は、眞野の新町。こゝに一週間ばかり滞在してゐました。宿は、山本清右衛門といふので。その家は今でも有りますが、住む人が違つて、豆腐屋に成つてゐます。ところが其

の隣りに、山本清左衛門といふのが、昔は蕎麥屋をしてゐましたが、現在では宿屋をしてゐますから、同じ山本で、清右衛門と清左衛門、一寸混じやすい。この新町の舊家で、山本半藏氏、號を靜古と云ひ、佐渡第一の郷土學者ですが、此所へ紅葉は能く遊びに行きました。趣味が合して、野呂間人形と一緒に見物して居ります。今その十王堂に、記念の句碑が建つてゐます。

この他に前で申しました矢ヶ崎宜親、それから小學校長の柴野といふ人達が、紅葉を歓迎しまして、四五人で越の長濱に、貝を採りに行きました。だが、どうも貝の方では、文豪を歓迎してくれません。一向採れない。それで已むを得ず、漁師から、小魚を買つて歸りました。これを東京流の天ぶらにして食はうといふ。天ぶらは紅葉の御自慢の一ツで、自分で揚げるのが道樂なんです。だが、講釋ほど上手では有りません。それを新町で佐渡の人に食はさうといふので。然うしてゐる處へ、頼んで置いた按摩が來ましたので、先生も考へた。天ぶらを揚げて肩を張らすよりは、人に揚げてさせて按摩に肩を揉ませた方がいゝといふので。これは其方が賢明で。其代り座敷から、按摩を取らしながら、一々差圖をします。ナカ／＼口がやかましい。柴野小學校長、少々ヘコタレて。

「先生油が刎ねるとイケません」

臂掛け窓を境にして、縁側の方へ退却して、そこでチュウチュウ揚げ始めました。然るに、いくら揚げる音がしても、天ぶらが紅葉の方へ運ばれません。それは其譯で。北村といふ無遠慮な男が、中途で失敬する。

「然う、天ぶらを中途で食つては、先生のお口へ入らない」  
「イヤお尋見だよ。滅多な物を先生には上げられないから」



これでは紅葉の口に入らない譯。

そこで紅葉山人、順徳院の御製を拜借して、一ツ狂歌をよみました。

いざさらば語らう人に事問はん

窓の方には何事か有る

これは有名な、——いざさらば磯打つ波に事問はん沖の方には何事か有る——それを文字りまして、窓の方には何事かある。

窓の向ふでは北村何某が連りに、天ぶらを失敬しながら、苦し紛れに、矢張、院の、御製。

思ひきや雲の上をば餘所に見て

・ 眞野の入江にくちはてんとは

それを文字りまして。

思ひきや奥の客をば餘所にして

窓のあたりに食ひ果てんとは

此奴アいゝといふので、山人も大笑ひに笑つたといふ。然ういふ無邪氣な、のんびりとした逸話も残つて居ります。此の材料は、山本脩之助氏の提供であります。

此邊で、お待ち兼の小木の港へと、逆に戻ります。小木へは、相川の歸りに、澤根の港から、汽船に乗つて行つたらしう御座います。宿を角屋といふのに定めました。此家は、もう今では有りません。紅葉は此角屋へ、荷物を置いたといふ程度で、殆ど寝泊りをしてゐません。それでいよく出立といふ時に、勘定書を請求しました處が「先生、御勘定を頂きたくツて、頂き様が御座いま

せん。一晩もお泊り下さらないのですから」と主人から一本。當人、これに一言も無かつたらうと思ひます。

紅葉を權座屋へ、初めて連れて行つたのは、伊藤文治といふ町長と、風間義太郎といふ小學校の先生達で、權座屋は、今では宿屋ですが、其の當時は料理店で。此時抱へ藝妓で小糸、餘り能く論じるので、民法藝妓と唄はれてゐた名物女。美人では有りませんが、才氣の勝つた人で。この小糸が。

「日本一の小説家といふのなら、どんな顔だか、一ツ見て來よう」お茶の給仕に自から進んで出ましたのが、抑もの始まりださうで。

この小糸といふ人は、今はモウ六十歳。小木の某紳士の夫人に成つてゐて、小木婦人會の幹部をも勤めてゐられる。この人に今度私が初めて會つたのは、日和山の山嘉の別荘の紅葉座談會の席で、葛西肇氏の主催で、その糸子さんを中心に權座屋の老主人、モウ八十二歳。それから元常盤屋のおかみであつたといふお久婆さん、その他大勢で。其時の筆記を、私が致しました中から、抜き取つて今日申上げますが。

紅葉が權座屋を、根據地としてから間もなく、有志の歓迎で船を二艘仕立て、三崎見物。釣り立ての烏賊の首を引抜いて、赤わたゞけ残して、袋の中へ味噌と少し酒を入れて、串刺しにして焼きます。烏賊の漬焼。これを大層喜んだといふ。

この時には、紅葉もエライ元氣で、自から船を取つて漕ぎました。實は餘り巧くはないので、船が小木の内の澗を、グル／＼廻つたらうと思はれます。乗つてゐる連中は、命がけで。

それから又他の日に、羽茂村へ船で行きました。又漕いだのでせう。大石の山嘉といふ味噌製造所、即ち葛西氏の處に、一兩日泊つて、盛んに筆を揮ひました。それで羽茂の有志が申合せて、包金で、五十圓お禮に差出しました。其頃ですから大金に近い。けれども紅葉はその五十圓を突ツ返しました。實に斯ういふ處は江戸ツ子でした。それで、現金では取つて下さらないのだから、では、御馳走をしたら好からうといふので。次ぎから次ぎと小木で招待。

實は此羽茂の連中は、皆金持の息子連で、自分達が遊びたい盛り。紅葉先生をグシに遣つたといふ。有りさうな事で。その中の一人、風間慎一郎といふ、今は亡き人ですが、これが小木の常盤屋といふのに招待して、極、秘密に、女將と打合せて、猪波屋のお竹といふ美人を紹介しました。此事は先年申上げました。

それに取けない氣で、葛西聚氏が、大隅屋といふのに招待して、おもよといふ藝妓を紹介しました。

處が、猪波屋のお竹の方は、三十三年の間、お糸さんの耳には入らずゐたのを、座談會の席で、おひさ婆さんの口から、初めて聽いて驚いた程。

然るに大隅屋のおもよの方は其の當時忽ち露顯に及びました。さア大變。小糸はヤキモキ。それよりは、權座屋の主人、末武權左衛門。これが承知しません「わしとこの客を、大隅屋へ引ツ張り出すなんて、山嘉の若旦那がケンカラン」眞赤に成つて怒りました。

座談會の席で葛西聚氏が、權座屋の老人を顧みて「あの當座は、お前に成るべく、會はんように逃げとツたよ。エライ怒り方で」と大笑ひで。

その大隅屋へ、まさか、小糸自から迎へにも行かれませんでしたので、使をたび／＼出しましたが、それでヤツと紅葉が歸つて來た時に、有り合せた三味線の裏へ書いたのが。

こいちゃ／＼で二度だまされた

又もこいちゃでだますのか

今では、紅葉遺墨中の珍品で。その三味線の皮だけ、保存されて居ります。

何しろ、尾崎紅葉、スツカリ好い心持に成つて了つたので、けれども眞に喜んで、身の廻りの世話をさしたのは、小糸ばかりで。新らしく浴衣を彼の女に縫はせ、ソレを着て喜んで居ります。日記にも此事が書いて御座います。未だ此他に、澤山面白い逸話がありますが、就中、紅葉が小木を去る。その見送りの一節。

これは併し、紅葉、佐渡物語中のクライマックス。それをお糸さんと、權座屋老人とから、聴きました。それよりも紅葉自身で、日記の一頁に記入してゐます、それを、俳人の星野麥人氏が寫し取つておきましたので、之は實に得難き史料だと存じますから、一通り、其の本文を讀みまして、それにチエイチヨイ註釋を加へて行きたいと思ひます。

そろ／＼讀みますが。

一三十日、俄かに暑くして、土用中の感有り。俾、不自由の處にて、一輛もあらず。已むなく徒歩して、六里の路を行くに定む。人々、町盡頭の上まで送る。風、權、邸の三人、村山迄送らんといふ。荷持の女を傭ひて従ふ。いと、藁草履ばき、兩棲とりて、先だちて、路傍の石に、いこひて待てり。

この風とは、風間慎一郎。權とは、權座屋の主人。邨といふのは一寸わかりません。つゞいて本文を読みます。

―村山迄、里餘。その三階といふ旅店にやすらひ、持たせし辨當をつかひ、いと、茶の給仕す。いと、暑かりければ、此れ迄に數度、木蔭に休みたり―

こゝで又註を入れます。三階といふのは、羽茂と小木との追分にある家で、三階茶屋とも云つたさうで、今はもう無く成つてゐます。又、本文を読みます。

―店を出て、二三町にして、下阪あり。その上に、孤松あり。人を遠望すべき處、其の蔭にて、告別す、いと、一語を發せず。道曲りて、影の見えざらんとする時、人々、一齊に聲を揚げて、後顧せしむ。余の影の密林に隠れて後、再び其の缺けたる處に出れば、彼等と予とは、弓の兩弭に在りて立つが如く、相面すれば彼等又聲を揚げ、いと、は、兩手を揚げ、或は帽子を揮ふもあり。予亦帽子を揮りて之に答ふ。後は、道、屈し、樹遮りて、終に相見ず。我戚然として胸の通るを覺ゆ。隨ふは、荷持の婦のみ―

實に名文で、簡にして情を盡せり。この別れは實に詩の様です。今は松も枯れて有りません。お糸さんの直話に従ひますといよゝゝの別れの時に、風間慎一郎氏が「先生一句」と持合せの扇を出して、渡しました。それにサラ／＼と書いたのが。

汗なんど拭いて貰うて別れけり

この扇をお糸さんが、大事に持つてゐたのでしたが、火事に遭つて、焼いて了ひました。惜しい事。

處が、この汗なんど拭いて貰うての、短冊が、チヨイ／＼出て来る。他の句ならイザ知らず、愛妓との別れに、ま、おのろけ半分で、書いた句を、他人様に無闇に書いて上げる様な、紅葉の性格では有りません。ニセツデが、いくら巧く出来てゐても、斯ういふ理窟に合はないのが有るので、消積で。

扱て、過まり傳へられた中で例の原稿事件が有ります。別れる時に紅葉が、原稿を書いて、小糸にやつて、わしが死んだら發表しろ云々。素より飛んでもない虚説ですけど、未だにそれを信じてゐる人が有りますから、私は念の爲に、お糸さんに問うて見ました。と、一も二もなく、否定しまして「原稿は、机が變るとどうも書けない。併しモン此所で書かなければ成らない場合には、安隆寺の一室でも借りて書く」と云つてゐらツしやいました。それで、私が頂いたのは、お手紙で有りまして、半紙に五枚。それは夷を御立ちの時に下さつたので―

その手紙をお糸さんは、誰にも見せない。見せないと成るといよゝゝ見たい。ヤイ／＼人々が騒ぎましたが、斷じて見せません。それで、まア原稿かも知れない。後には、かも知れないが取れて、原稿だ、と極つて了つたので。この手紙も火事で焼けて了ひました。

この手紙に就て、三十三年の間、誰にも語らなかつた事を特に私に聽かしてくれました。權座屋の當主、末武末吉氏を立會人として有りました。

「もし私が死んで了ひましたら、手紙にどういふ事が書いて有つたか、闇から闇に成りますので、先生の御親友に、聽いて置いて頂きたいと思ひます」半ば涙で語りもし、聴きも致しました。

併し、遺憾ながら、全部それを發表する事は出来ません、が、第一その手紙を、何故人に見せな

かつたかといふと、それは次の如き意味で、書き出して有りましたので。デ、その手紙の意味は。

折角、お前と二人でいろ／＼語り合ひながら、送られようと思つてゐたのに、どうも大勢附いて来てくれたので、甚だ物足りない別れをした。

然ういふ意味の文言で。これでは、どうも、人に見せられません。折角一里餘りを、暑いのに送つて来た人々に、お前達は別れの邪魔をしたといふ不平ですから、お糸さんとしては、どうしても見せられません。

だが、此所に紅葉の文學精進の本領が見えて居りまして。すべて紅葉は常住の事を頭の中で先へ創作する。お糸との別れを前以て空想で描いて置いて、その本文通りを實行して見たい。然ういふ流儀。ところが其型に嵌つて来ないで、ワイ／＼連中が大勢附いて来たものですから、彼一句、我一句、こしらえて置いた警句が、役に立ちません。——汗など拭いて貰うて別れけり——この句も恐らく、前から作つて置いたのではないかと、私は然う疑はれて成りません。それは、お糸さんの話によると、汗を拭いて上げた事はなかつたといふのですから。

それから、手紙の最後のあたりには、次の様な意味で書いて有りましたさうで。

之から後、續々私の友人が佐渡へ来る様に成る。来たら必らずお前を呼ぶに極つてゐる。其時に、尾崎が、あんな者を愛顧にしたと云はれない様にして、どうか立派な女に成つてくれ。かりそめの契りではあつたが、他人とは思はれない。切に、お前の幸福を祈る。

もう二三年したら、再び佐渡に遊びたく思ふが、その時には、どうかお前が、人の母と成つてゐる姿を、私は見たく祈つてゐる。

然ういふ意味で書いて有つたと云ひます。私は、之をノートに取つてゐる間に、知らず／＼涙。インキの字を滲ましたので御座いました。話す人も、話しながら紅葉がなつかしい。聴く者も、聴きながら紅葉がなつかしい。

それじ。

『もう、今では、あなたも單なる小木の婦人ではない。紅葉の文名の盡きぬ限りは、あなたも文壇歴史中の一人なので、どうか、自重して晩年を、清く、美しく送つて頂きたい』

然う云つて老行脚は、亡友の舊情人と、淋しく別れたので有りました。

曾て紅葉は、人に向つて、『佐渡には本統の人間がゐる』と云つて、禮讚しました。それから又『今までの旅行の間では、佐渡が一番面白かつた』と衷心より申して居りました。

生活上にも、文學上にも、悪戦苦闘をつゞけてゐた彼。そのの一生涯中に、最も楽しい旅行をさせて頂いて、多大の慰安を與へられた佐渡の國。その人、その土、その海、それに對して我等友人は、どの位感謝してよいか知れませんが、潜越ながら私が代表して、三十三年目に御禮を申上げて、お別れと致します。失禮。

## ラヂオ打明け話

九四

初めて放送の時には多少固く成りましたけれど、併し牠が云ふ様に遣り難いといふ事は有りませんでした。能く誰でもが云ひ且つ誰でもが想像して——聴き手が一人もゐない處で、アテもなく喋るのは、張り合がなく、さぞ喋り難いでせう——それは單なる講演なら、一寸調子が乗りますまいけれど、ラヂオ放送は一種の原稿朗讀ですから、却つて人のゐない方がいゝのでありまして、又、聴衆が何十萬、何百萬、其中の人々が欠伸をしやうと、居眠りをしやうと、野次り出さうと、此方には一向見えず聴えずで、それが皆自分の講演を熱心に聴かれてゐるといふ自己陶醉で、受持の間だけは、こちらの自由。少しも衝動を感じないのですから、却つて遣りよくも御座います。

その原稿、それを正直に朗讀してゐる、然ういふ感じを、一寸でも聴く人に與えるのは、甚だ拙劣。私が聴く側に立つて考へると、ハハア此人は讀んでゐるな、と直ぐわかります。それはイクラ口語體で原稿を書いても、その心持が「話さう」とするのでなく「讀む」つもりですからイケないので。私は一ツの原稿を何回も何回も讀み直す。否、話し直して、恐らく十回以上も練習をつゞけ、當日迎への自動車があれば、その途中、車の上でも口の内で繰り

かへし、到着して應接間に入つても、色鉛筆で口調の悪いところを修正してゐます。或はコ、早くとか、コ、遅くとか、太く、細く、老けてとか、若くとか、一々記入。つまり樂譜の作製です。その位放送に熱意と誠意とを持たないでは、敏感なフアンの耳に快く入り様が無いので御座います。それは實に微細な欠點でも、ハツキリと聴く方には傳はるのですから、決してゆるがせには出来ません。

放送開始當時に（未だ私が放送しません時に）文士連がチヨイ／＼放送しました。さすがに巖谷小波はイタにつき過ぎる位でしたが、他は皆落第、實に成つてゐませんでした。人の事ながら顔を赤くするほど、斷然マツイものでありました。田山花袋なんか、セカ／＼早口も早口、全速力で、それから岡鬼太郎なんて、あんな苦勞人でさへ、寄席の話をした時なんか、餘りに早過ぎて、昔の寄席を知らない人には、まるで分りませんでした。久米正雄なんて人は、又餘りにラヂオを甘く見て掛つたのか、内容貧弱、樂屋落の連發で、微苦笑の自己宣傳を聴かされたに過ぎませんでした。（未だ他にも有りましたが）そこで、私は、人の缺點を残らず知つた上で「おれなら、あんな風にはやらない」といふ様に、充分注意して、自分で自分の講演を筆記する態度で、先づ原稿を作りました。それを又何度も一人で講演して、その度に修正を加へました。幸に大好評（自分で褒めるのは慢心だなんて、そんなモウ遠慮なんか、此頃止めました）

最初の頃は、マイクロホンもわるく、餘程大きな聲を出さなければ成らなかつた。（然うでもなかつたのでせうが、そんな氣がして）それで私は直立して、普通の講演の如く大きな聲を張り上げました。處が、原稿を手持つてやるのでは具合がわるい。テーブルは椅子に掛け

るのが標準ですから低い。下に低く原稿を置いたのでは、老眼で読めません。それで義太夫用の見臺を借りて、テーブルの上に置いて見たり、洋樂の樂譜臺？アノ鐵製の借りたりしてやりました。處が、先年、病氣中を無理に出かけた時に、杖を突いてはゐましたが、途中から耐えられなく成つて、危く卒倒しかけました。それから以後は、椅子に掛けてやる様に成りました。普通の談話の時の聲でいゝのですから、前から考へると樂には成りましたが矢張調子に乗ると、大聲を出して、失敗も致します。誠に悲哀を感じますのは、殆ど總入齒で、どうも舌の廻りが不良で、發音を過まる事が多くあります。

私が一番嫌ひなのは、講演者の中に「唯今御紹介に成りました、私は何々で御座います」とやる人があります。普通の講演の場合には、それもいゝのですが、ラヂオの場合には、二三秒の直前にアナウンサーが、その名をハツキリ紹介したので、聴く人は既に承知なのですから、改めて自から紹介する必用はない。のみならず、却つて耳障りで、又時間が惜しい。時間と云へば最後に至つて「モット申上げたいのですが、時間が有りません」時間の無いのは初めから分つてゐるので、與えられたる時間だけの材料を喋れば、それでいゝわけで。短かい時間に、アレも云ひたい、コレも云ひたい、いろ／＼迷ふからイケないのです。一尾の鯛を全部料理して食はせ様とするから、結局何んにも出せない事になるので。鯛なら鯛で、ボンと頭部だけ切つて、その眼玉を潮煮にして出せば客は喜ぶ。片身刺身で、片身鹽焼にして、アラを煮付けにしてなんて、マゴ／＼してゐるから時間が来る。結局、頭の問題でせう。甚だ失禮だが、頭の悪い人……いや、頭の悪い鯛が多いので（何んだか分らなくなりました）

扱て、原稿。その原稿を、巧みに朗讀——話してゐると同様に聽かせてゐる——とは知らずに、斯ういふ申込をされて面食つた事がありました。それは仙臺放送局から、會津藩士田邊軍次が、白河城外で裏切者に天誅を加へたといふローカル物。それを放送した翌日、白河町へ乗込んで、西郷村々長鈴木市太郎氏や、白河町有志諸君の好意で、講演會を開く事に成りましたが、その主催者側の注文中に「昨夜放送された田邊軍次を、是非此所でもやつてくれ」これには恐縮して「いや、あれは放送ですから」と謝ると「いや／＼昨夜でさへアレだけに話せたのですから、今夜は二度目で、もつと巧く話せませう」原稿のトリツクが、どうも呑込めぬらしいので、マサカ聴衆の前で原稿を眼鏡を掛けて讀むわけにも行かず、これには降參を致しました。

その眼鏡ですが、大正十五年七月十六日、子供の時間が午後四時からでした。「荒武者荒入道」を連続三日間、その最終日。此年初めての暑さ。それまでは天候不良で、少しも夏らしくなかつたので、局の方でも油斷がありました。自分も亦同じくで。然るに、狭い放送室。忘れもしません、この日は第二の演藝室で、アナウンサーは松田氏。や、暑い暑くないのと云つて、正に九十二度。それを縮切つて、煽風器を止めて二十六分間。今の様に冷房装置はなく、花氷は据えてありました。が、そんな物は何んにもありません。それを力一杯の武勇童話、汗は宛如瀧の如し。後で知れたのですが、新調の夏袴の腰板までがグショ／＼。正に殺人放送室です。風通しの好い宅で九十二度ですから、密閉した室内は當然百度に近かつたでせう。でもトン／＼と運んで、最少しで讀切りといふ時に、額の汗が傳つて鼻眼鏡が（その頃用ゐてゐました）ツル／＼滑つて、バッタリ下に落ちま

した。さア大變、原稿が読めません。それも最後で、美文的にトン／＼追ひ込んで来た處ですから原稿を離れて、與太を飛ばしたのでは、折角の終末がメチャヤです。思はずウーと唸りました。幸、松田さんが氣を利かして、眼鏡を拾つてくれましたので、ヤツと助かり、後はどうやら無事。こんな困つた事はありませんでした。

これから幾多の失敗談、手前味噌、各放送者の批評、各アナウンサーの評判、各放送局の様、忌憚なく毎巻試みたいと存じます。

私の今日まで放送した局は、東京、大阪、名古屋、廣島、仙臺、札幌、新潟、金澤、静岡、長野、福岡、長崎、京城、それだけです。未だ澤山残つてゐます。

瀬戸内海の島々を、四月十五日から行脚中で、東京との連絡絶え、

漸く四月二十七日、廣島放送局にて受取り、初めて校了。

### □次巻豫告□

水蔭講演全集

## 實說金色夜叉

(五月末?  
六月初?)

尾崎紅葉の代表作——明治文壇の大産物——其モデルに就て種々のゴシップが飛んでゐます。間貫一は巖谷小波であるといふ噂は、餘りにも有名でありますが、私は小波の爲に之を採らず。紅葉の爲にも之を打消してゐる一人です。秘中の秘事、真相の真相、公平に、無遠慮に、徹底的に發表して置くのが眞の友情だといふ確信の下に、此一篇を書きました——水蔭白。

### ▼赤裸の紅葉▲

### ▼小波の靈柩を送りて▲

——其他 數 篇——

### 續 卷

### 附 錄

幕末騷動實說  
日本國技漫談  
明治時代餘話

實話傳説漫談  
日本武勇童話  
以下三篇同様

定價 金五拾錢 (送料不要)

昭和九年五月一日印刷  
昭和九年五月五日發行

著作者 水蔭 江見忠功

發行者 倉野清雄

印刷者 大島豊作

印刷所 東京市淺草區 福井町一ノ二七 太英社印刷所

東京市品川區南品川 一ノ二五二

發行所 江 水 社

振替口座 東京二九二三〇番

—— 殘本各卷僅少  
再版當分不製 ——

日本一の粗製高價本  
百年後の世界的珍書

第壹卷 佐渡へ佐渡へ (再版)

第二卷 信濃よ越後よ (既刊)

第三卷 九州と北海道 (既刊)

實感實記  
自著自版

# 水蔭行脚全集

第四卷 十縣飛々行脚 (既刊)

第五卷 樂行脚苦行脚 (既刊)

第六卷 北國中國東國 (既刊)

讀者が一緒の旅気分

讀者が最後の大努力

—— 定價金壹圓也  
郵送料金不要 ——

一字一涙の記録  
一世一代の傑作

水

蔭

の

娘

紙數五十頁  
寫眞版九面  
定價三五錢  
郵送料不要



終

